新制女子國語讀本

新教授要目準據

卷六

375.9
An4
資料室

42437

教科書文庫

4
810
42-1938
200030
1745

S.13
1938

資料室

375.9
A24

昭和十三年一月二十六日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

臺北帝國大學教授
學習院教授 安藤正次
東條操 共編

新制女子國語讀本 卷六

新教授要目準據

東京
大阪 三省堂

雪　景　色　（第一課參照）

廣島大學圖書之印

廣島大学
教
39117
図書

卷六目次

一　月雪花　芳賀矢一　一
二　紅葉を焚いて　北原白秋　九
三　東大寺　薄田泣菫　三
四　大原の里　佐佐木信綱　一六
五　山村の祭　荻原井泉水　二
六　家紋　沼田頼輔　二八

七　朝鮮の四季　遲塚麗水　三七
八　熊野落　太平記　四五
九　伊勢志摩の海　田山花袋　五三
一〇　安乘の稚兒（詩）　伊良子清白　六〇
一一　安壽と厨子王　森鷗外　六三
一二　四時の變遷　大町桂月　八〇
一三　時雨（俳句）　諸家　八七
一四　川柳と女性　山內素行　八九

一五　萩大名　狂言記　九六
一六　少女の歌　北原白秋　一〇三
一七　靜かな友達　生田春月　一〇四
一八　阿新丸　太平記　一一四
一九　自然と藝術　本間久雄　一二六
二〇　早春　今井邦子　一三
二一　扇の的　平家物語　一三七
二二　野村望東尼　德冨蘇峰　一四二

二三　信仰　釋宗演　一五七
二四　蜜柑　芥川龍之介　一六〇

――目次終――

帝國大學圖書之印

芳賀矢一
文學博士。國文學者。福井市の人。昭和二年歿、年六十一。

新制女子國語讀本　卷六

一月雪花

芳賀矢一

煌々たる活動の日の光西に沈めば、玲瓏たる一輪の月休息の夜を照らす。月の光は溫和で、日光のやうに峻烈ではない。日は赫赫として仰いで見ることも出來ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一度出れば群陰皆影を伏して、大小の有象無象は悉く照破されるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤・貧富の差別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である、慈愛の光である、炎熱を伴なはない清涼の光である、皎潔・無垢・崇美と稱ふべき優しい光である。休息・安靜の夜には最もふさはしい此の光に對しては、誰しも人生

うちむかふ云々
荷田蒼生子の歌。

武藏野の月

の慰藉を感ずる。詩的情緒は油然として湧く。晝の間は猛獸と鬪つて居る熱帶の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱國の椰子の陰、寒地の氷の家、眺める人の心々は違ふであらうが、隈なく世界を照らす月光の人の胸懷に浸みわたることは、恰も其の影が千草の露の玉毎に宿るやうなものである。

「うちむかふ月は一つのかげながらうかぶは千々の思ひなりけり。」である。

東西・古今、悲喜・哀歡の情熱は、幾萬

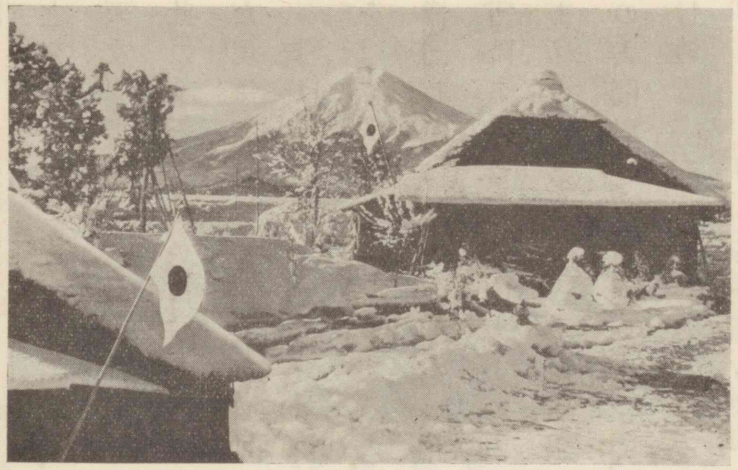
花ならば云々
新續古今集、僧仙覺の歌。

三千世界云々
唐の詩人白樂天の句。

廣寒宮
月の中にあるといふ宮殿。

回となく幾億回となく、此の光に向つて訴へられた。之を嗟歎し之を吟咏した詩歌の感吟は、世界各國の文學に充ち滿ちて居る。天文學者はいふ、「月は地球の衞星で、全く死んだ冷塊である。」と。此の冷たい光が古往今來どれほどの暖かみを人間に與へたか、また現に與へつゝあるか。月は永久に人間の友である。

雪は月よりも一層冷たい。貧富・貴賤の差別なく、其の純潔な色を以て乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓・茅屋も皆同じ色に埋められる。「花ならば咲かぬ梢もまじらましなべて雪降るみ吉野の山。」といふやうに、眼に入るもの悉く其の下に包まれてしまふ。「三千世界銀成(シヲ)色、十二樓臺玉作(スヲ)層。」の美觀は、一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を抱かしめる。天から落ちて來る此の純白な色に比べては、地上の花も甚だしく汚く感じられるのである。霏々と散り紛々と飛んで、た



田家の雪

だ一條の川水を殘して、山といはず、野といはず、瞬くうちに瓊玉を敷く莊嚴な觀は、眞に人目を眩せしめる。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも變らぬ。花紅葉いろいろな眺はもとより美しいに相違ない。花の散つた後の新綠の色も目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉もない冬枯の時に、地上の萬物が此の銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧を盡くしたもの

吉野の櫻

ではないか。一年中蓮の花の咲いて居る極樂淨土は、決して我等の世界ほど樂しいものではなからう。

雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪はたゞ一色である。花のさまゞ、どれを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり咲きみだれるのは、人生としては餘りに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に芳しい匂さへ持つて居る。我等の食用のために作つ

花をし見れば云々
「年ふれば齢は老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし。」
（古今集、藤原良房）

た菜や大根の花でも、無限な詩趣を備へて居る。富貴の庭園に培はれる花に價を生じたのは無理はないが、山の花、野の花、いづれも月・雪と同じやうに一文錢を要せぬのも嬉しい。人生に花なくんばどれほど寂寞を感ずるであらう。閑寂を旨とする茶室の内にも、床の間に一輪の花は必要である。是は寧ろ花を貴んで其の濫用を慎んだのである。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。月・雪の眺は其の皎潔を愛し其の清淨を貴ぶが、花は其の艶麗・華美を以て人生を飾り人心を慰める。花やぐ、花やか、花々し、華美・華麗・華奢などの語は皆花に基づいたものである。古今東西の詩歌は擧げるだけ愚かである。余はたゞ「花をし見れば物思ひもなし。」といふ古歌を以てすべてを總括し得べしと信ずる。

月・雪・花三つの眺には各〻其の特長がある。いづれを前いづれを後といふ事は出來ぬ。

やまざくら云々
新古今集、康資王の母の歌。

冬ながら云々
古今集、清原深養父の歌。

笠は重し云々
謠曲「葛城」の句。

やまざくら花の下風吹きにけり
木のもとごとの雪のむらぎえ

是は花を雪に譬へたのである。

冬ながら空より花の散りくるは
雲のあなたは春にやあるらん

是は雪を花に譬へたのである。

笠は重し吳山の雪、鞋は芳し楚地の花。肩上の笠には無影の月を傾け、檐頭の柴には不香の花を手折る。

是は雪を月と花とに譬へたのである。

花を賞して月を愛せぬ人はない。月・花を愛して雪を賞でぬ人もない。

思へば、世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中氷雪に鎖される極北の國では、氷は卽ち人の家である。此の地方の人

には寸紅の目を樂しましめるものもない。また之に反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱帶の住民は、瓊玉を綴る奇觀を見た事がない。ガス・電燈の光に不夜城の觀を呈して夜更を知らぬ繁華なロンドンの住民も、秋・冬の半年は美しい月の光を見る事が出來ない。我等日本人が昔も今も此の三つの眺を擅にする事を得るのは、眞に天與の幸福ではあるまいか。月・雪・花の眺は古人の歷史が加はつて一層の感興が增す。「世々を經てながめし人の數にまた我をもゆるせ秋の夜の月。」月は古來の歷史を照らす鏡である。「年々歲々花相似。歲々年々人不同。」人生の感は花を見て益〻繁く雪を見て愈〻多い。二千六百年來、月・雪・花三つの眺を有し得た我等祖先の遺蹟は、如何に多くの感興を我等に與へたるよ、如何に多くの追慕を我等に催さしむるよ。

（月雪花）

世々を經て云々
伊藤仁齋の歌。

年々歲々云々
唐の劉廷芝の「白頭ヲ悲シム翁ニ代ル。」の詩中の句。

二　紅葉を焚いて

北原白秋

紅葉して來た。庭の楓が紅葉して來た。紅葉ばかりになつてしまつた。「寒くなつた。」と私が云へば、妻も「さうでございます、寒い朝で――」と袖を合はせる。さうはいふものの、たとひ二十日でも住み馴れて見ると、この離家が何とはなしに古びて來て、やつぱり二人の住ひらしい。二人もどうやら落着いて來た。「紅葉でも焚いて見ようか。」と私が云へば、妻も素直に、「焚いて見ませう、寂しいから。」と庭に下り立つ。竹の箒で私が掃けば、蹲んで妻が拾ひ集める。かさこそと、落葉と落葉とが擦れ合うて、それを二人で集めてゐれば、今はもう秋も限りと思はれる。遠州風の濡石の上、枯れた芝生の凹みなどの落葉は一しほ哀れ深く、土の濕りもにじみ過ぎてゐる。

北原白秋
名は隆吉。詩人。歌人。福岡縣の人。明治十八年生。

煙が立つ。煙が立つ。庭の楓の紅葉の陰から煙が立つ。紅葉を焚いて、ぷす〳〵と白くくすぼる煙のかげで、「溫かいぞ。」と私が蹲めば、妻も諸手をかざして蹲む。青い枳殼の小枝などまた折りくべて、「長い感冒であつた。」と私が云へば、「私もどうやら感冒氣で――」と、妻もわびしい。「大切におし、旅で病んでは心細い、私も今度は頼りなかつた。」と、私も紅葉をまた火にくべる。「ほんとにね、それでも早くお癒りになつてようございんした。」と、妻もまた紅葉をくべる。「それもみなお前のお蔭だ、よく來て呉れた、あり難かつた。」と、しみ〴〵、私は煙に咽せる。「いゝえ」と妻も、向ふへ立つて、紅い紅葉を拾つて來る。「早く歸らう、お前がまた病氣にならないうちに。」と云へば、「ほんとに早く歸りませう、何と云つても自分の家がいちばんいゝ、旅は寂しい、心細い、殊にこゝらは霜が深くて、もう雪にでもなりさうで。」と、一きは赤く火を吹き立てる。煙が立つ。煙が立つ。紅い楓の葉陰から煙が立つた。

煙が立つ、煙が立つ、庭の楓のもみぢの葉から煙が立つ。旅に來て長らく病んだが、實に心ぼそいものであつた。俳諧の聖芭蕉でさへも、旅に病んでは寂しかつたか、「夢は枯野をかけ廻る」と云つたではないか。「お互に大切にする事だ、惜しい物は命だ。」と私が云へば、妻も寂しく笑つて咽せた。善い煙だ、寂しい善い紅葉だ、せめてもう少し溫まつてと、紅葉を焚いて、梢の紅葉ももう末かと仰いで見れば、はら〳〵とまた滾れてくる。

もう善い、もう善い、善い程に焚いて朝飯にしませう。煙が立つ。煙が立つ。紅い楓の葉陰から煙が立つた。

（白秋詩集）

芭蕉　姓は松尾、名は宗房。俳人。伊賀國（三重縣）の人。元祿七年（一六九四）歿、年五十一。
夢は枯野を云々　「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる。」（芭蕉）

三東大寺

薄田泣菫

薄田泣菫　名は淳介。詩人。文章家。岡山縣の人。明治十年生。

密迹・金剛　寺院山門の兩側に立てる二王尊で佛教守護の神。

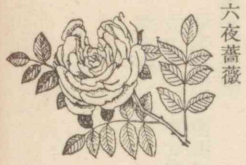
月がよいので東大寺のあたりへ出かける。すく〳〵と大樹の立ちこめた境内の森には、月の光も流れかねて、陰森の氣が煙のやうに迷うてゐる。このやうな宵に木立の下路で迷ひでもするものならば、きつと鬼の落した蠱（まじもの）の係蹄（わな）にかゝつて、夜一夜歩き廻つたところで、いつかな路標を見つけることも出來なからうと思はれる。

南大門は撞木杖をついた翁のやうに、支柱にもたれて、そのすばらしい身體を、じつと空に擡げてゐる。密迹（みつしやく）・金剛の二力士は、この靜かな宵にも、その三丈に餘らうといふ體を起して、胸肉を張り寶杵を揮うて、張肘に控へてゐる。銀の雫のやうな月明りが盜むやうに窓にこぼれて、肩よりふくら脛にかけて半身に流れる。肉むらの色がいかにも冷たく、また美しい。じつと見てゐると、いかめしい顏のどこやらに追懷の夢ごこちが漂うて、靜かに吐息をつくかのやうに思はれる。併し、それもほんの一瞬の間で、再び劫初このかた寶杵を揮うて、教法を護つてゐる金剛神の居丈高な姿に歸つてしまふ。

南大門

佛殿の中門は閉されてゐる。百間にもとゞかうといふ廻廊は、鳥の翼のやうに左右に開いて、はては見えなくなる。門の透間から、かいま見ると、金堂の扉は靜かに閉ぢて、屈託さうな燈明が一つ

永祿の昔
永祿十年、松永久秀の兵火に罹かる。



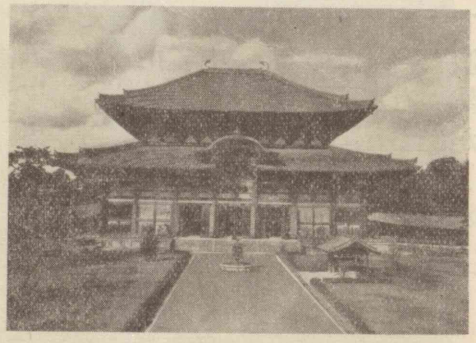
十六夜薔薇

瞬いてゐる。堂守の僧でもゐるのか、どこやらに囁くやうな響がして、それもやがて消えてしまふと、あたりはもとの靜寂になる。天人の足音も聞えさうな宵である。このやうな靜かな夜を、じつと佛殿の闇に閉ぢこもつて、毘盧舍那佛は何を觀じてゐられるであらう。永祿の昔佛殿が炎上してより後、百三十餘の夏冬は、佛はいつでも露宿でいらせられたといふ。その頃は、夢のやうな月夜の靜けさに、醉心地になるまでも見とれてゐられたであらう。どことも知らず十六夜薔薇のにほふ卯月の宵に、春日野の木立より洩れるながし目のやうな月明りに濡れながら、又は佐保の川瀨に衣晒す女の唄も眠つた眞夜中、秋篠のあたりに沈み入る月影を眺めて、ひとり法界の久遠を想ひ、閻浮の世の流轉を觀ぜられた姿は、どれほど美しく又偉大なものであつたか。今宵はそれらの追懷に、しみじみと寂寞の盃を味はうてゐられるかも知れぬ。

密迹・金剛の二力士

佐保川
添上郡佐保村。

秋篠
生駒郡平城村の古名。



大佛殿

さびれた舊都の宵は、もう夜半過の心もちがする。

（落葉）

佐佐木信綱
文學博士。歌人。三重縣の人。明治五年生。

大原
京都市の北々東、比叡山の北麓にある小村。

高野川
賀茂川の一支流。

西行
俗名は佐藤義清。歌人。鳥羽上皇の北面の武士であつたが、後出家して西行と號した。建久三年(一八五二)歿、年七十三。

寂然
俗名は藤原頼業。歌人。

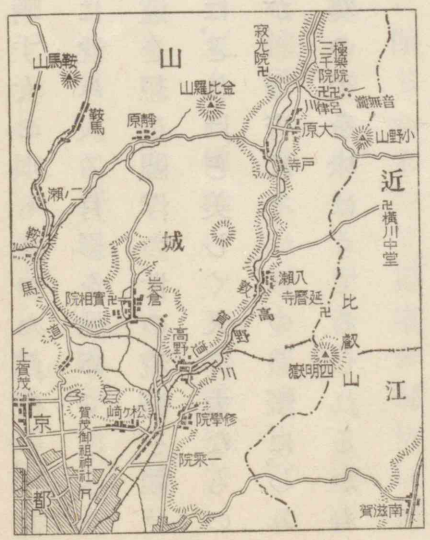
四 大原の里

佐佐木信綱

忘れがたきは大原の里なり。高野川にそひ、比叡の山に向ひゆく。道は山裾をめぐりて、谷あひ山かげには、野菊咲き、薄なびけり。八瀬の里を過ぐれば、山路いよ〳〵深く、二里あまりにして大原とぞいふなる。

西と東とには山並連なりたれど、中は打開けて、家居あり、田畑あり。梢の紅葉はまだしけれども、田の面は稲重く實りて、秋深し。高野なる西行が寄せし歌に答へて、寂然がよめりし、

何となく露ぞこぼるゝ秋の田の



惟喬親王
文德天皇の皇子。和歌・詩をよくし給ふ。貞觀十四年(一八三)御出家遊ばされ、寛平九年(一五五)薨、御年五十四。

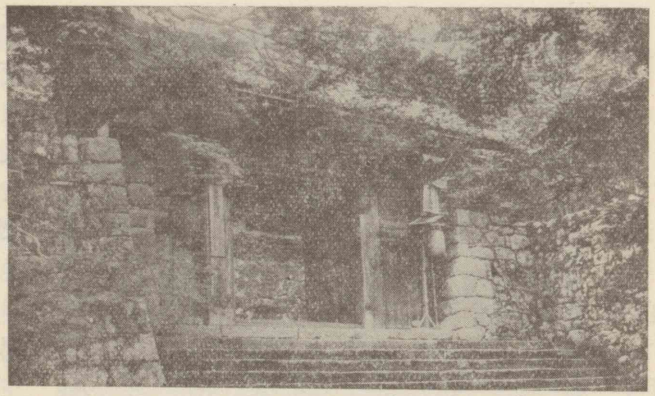
雪わけて云々
在原業平のこと。

三千院
最澄を開山とし、本尊は藥師如來を安置する。天台宗。

頓阿
室町時代の歌人。元中元年(一三四四)歿、年八十四。

往生極樂院
三千院の本堂。

惠心僧都
比叡山慧心院の學匠。大和國(奈良縣)葛城の人。寛仁元年(一六七)歿、年七十六。


三千院山門

引板ひきならす大原の里のさびしき味はひ、胸にしみわたりておぼゆ。

まづ惟喬親王の御墓に詣づ。雪わけ三ておとなひまゐらせし歌人の上を偲べば、藤波の盛あやなる王朝史の序幕の、此千院のかそけき山里にて、靜けくもはた哀れ山にも開かれしそのかみぞまさやかなる。

三千院の杉苔庭に生ひて、鶺鴒池の岩門間を飛びかへり、頓阿が歌によめりし涙の櫻は跡たえたれど、物ふりたるところの樣に、心も澄みつ。往生極樂院には、惠心僧都が母のために造りきてふ佛像あり。船形の天井なる畫は、

聲明
如來の功德を讃美供養する譜。

隱岐遠流の御身
後鳥羽上皇の御事。

朧の清水
寂光院の東方にある清泉。和歌の名所。

建禮門院
高倉天皇の中宮。安德天皇の御母。壽永二年（一八四三）平氏滅亡の後、尼となり大原に閑居し給ふ。建保元年（一八七三）崩、御年五十七。

右京大夫
世尊寺伊行の女。建禮門院に奉仕した人。

柳原安子
香川景樹門下の女流歌人。京都の人。慶應二年（一三三六）歿、年八十四。

源氏物語
五十四帖。一條天皇の時（一六四六—一六七）紫式部の著した小說。

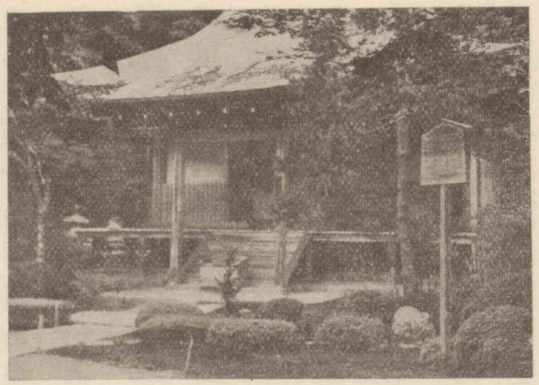
落ちて、筆のあとおぼつかなく殘れり。

「夜に入れば鹿の鳴く聲も聞ゆ、一夜宿り給へ。」と、ねもごろにいはるゝ前の天台座主梅谷大僧正のあつき志にもそむき、急ぐ旅路のそこゝと見めぐる。名をとへば何々坊何々と答ふる雛僧に案内せられて、呂律の川の源を音無の瀧にたづね、請ひてその雛僧が聲明をうたふを聞きつ。また法華堂の陵をたづね、隱岐遠流の御身ながらに、遠くこの山里を忘れかねさせられ、遺言して御髮をこゝに納めたまひし詩人の上皇の御上に涙をそゝぐ。朧の清水は民家のかたへにあり。その昔こゝに良暹法師のすめりし時、素意法師のよみておくれる、

水草ゐしおぼろの清水そこすみて
心に月のかげはうかぶや

の歌のあはれは、今も昔ながらなり。

寂光院は、こだかき岡の上にあり。かけひの水ほとゝと音して、折から夕暮のうすれし日かげさびし。燈して、建禮門院の御像をみる。一代の國母と仰がれ給ひし花の御生涯の名殘を、この山かげの墨染の袖とかへ給ひし御上は申すまでもなく、殊に偲ばるゝは、女院こゝに住み給ひて後、院を慕ひておとなひまゐらせし女歌人右京大夫のことどもなり。前庭の鐘樓のもとには、幕末の女歌人柳原安子の歌碑あり。


寂光院

歸るさの道は全く暮れぬ。田も、畑も、森も、山も、夕霧の中にうもれて、空には、微かなる月影の、道の邊の蟲にこたふるやうなるもあはれなり。源氏物語なる夕霧大將の、落

葉宮をとひ給ひしあはれなど、心にうかびつ。

八瀬大橋のわたりにては、葬儀の歸るさとて、白き衣きて燈火もたる大原女の群にあひつ。さながら夢の國の人とこそ覺えしか。

京都に遊びし折、市田氏に案内せられておとづれし大原の秋のあはれも、今は五年前の語りぐさとなりつ。秋ふかき武藏野の昔を、東京郊外の稻田にしのぶこの頃、わが心は、そゞろ大原の山里にむかふ。

（信綱文集）

荻原井泉水
名は藤吉。俳人。東京市の人。明治十七年生。

柏原
長野縣上水内郡柏原村。

一茶
通稱は彌太郎。信濃國（長野縣）の人。俳人。文政十年（一八二七）歿、年六十五。

妙高山・黑姫山
共に長野・新潟の縣界に近い。

赤倉溫泉
新潟縣中頸城郡名香山村にある。

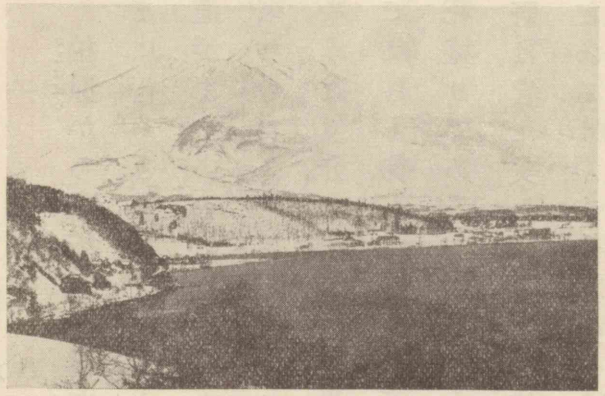
野尻湖
長野縣上水内郡濃泥村にある。

五山村の祭

荻原井泉水

柏原（かしはばら）から、舊街道の落ちついた家なみを北へ、爪先上りになるまに行くと、家がだん〳〵になくなつて、それから先はたゞ廣い國道がまつすぐに延びてゐる。私は荷物を停車場に一時預にして來たので、ステッキの代りに持つた蝙蝠傘一本の身輕さを、散歩するやうな氣分でゆつくり歩いた。一茶が御自慢であつた——「信濃では月と佛とおらが蕎麥」と彼が詠（うた）つた——蕎麥畑が澤山あつて、花盛りである。妙高山と黑姫山がよく晴れてゐる。妙高山の裾野は實に美しい。その綠を敷いたずつと上の、ぼうつと煙が揚つてゐる所が赤倉溫泉であらう。そこに私が滯在してゐた時、隣室の客が暗い夜の底を指して、「あそこに灯が一つ見えませう。あれが野尻湖の村の灯です。」などと話してゐた、その野尻湖への道を

私は今歩いてゐる。そして、かの赤倉を今度は下から一すぢの煙をあてに眺めるのであつた。



野尻湖

道は平らだが、人通りは極めて淋しい。その中に晴着の子供をつれた人人の幾組かを見たが、それは、けふ野尻にお祭があるからだといふことを野尻に近くなつてから知つた。道の端には、墨の痕のさわやかににじんだ幟が立てられてゐる。吹流のやうな色布を初秋の風に流してある。そのあたりから右手に湖水の一角が銀をたたへたやうに光つて、村の家がちらほらと續きはじめる。祭禮の提灯がつつてある。太鼓と笛の音が

宇賀神社
野尻湖の東岸に近くある琵琶島に祀られてゐる神社。

聞える。村の人はけふこの淋しい村をできるだけ華やかに美しく飾つたり、賑やかに景氣づけたりしてゐると見える。それにしても、何といふ淋しい村であらう——。

梨や林檎を筵にひろげた店、氷水を賣る店などの間を湖の方へ行くと、うねくしとした青田の中の路は、小學校のまはりを一周して、初めて湖の前に出た。宇賀神社を祀つてあるといふ琵琶島は尊げに茂つて、鳥居の色も鮮かに水に映つてゐる。舟が二艘、神輿を載せ、旗を立てて浮かんでゐる。太鼓と笛の音はそこから響いて來るのであつた。岸には島への渡舟を繫いである。近在からこの祭に來たやうな人々が、札を買つてはそれに乘る。一艘に滿ちると、舟は岸を離れるのである。私もその舟の中の一人になつた。

「こんなに淺いのか。」

「何の、先へ行つてみろ、底がみえやしない。」

「綺麗な水だな。」

「壜を持つて來りやよかつた。」

一つの舟に乘つた男や女がこんな話をしてゐるうちに、船頭は棹をやめて櫓をとつた。水を見ると、水は青々と靜かに深い。空を見ると、空も青々としてほのかに深い。その中に晝の月が白く浮出てゐた。

私の乘つてゐる舟は、神輿を載せて漕いで來る舟と行違つた。その神輿は、けば〳〵しい色紙を貼付けた飾物のやうな作りで、恐らく村の青年等の手になつたものであらう。それを持つて本社に詣で、今、引返して來たところと見える。神輿の周圍には青年たちがぎつしりと乘りこんで、銘々に鳴物を合はしてゐる。その太鼓を打つ青年の勇み方はどうだ。身體ぢゆうに力を張りつめて、

自分の肉體そのもので太鼓をひつぱたいてゐるやうに、腰と腕との彈力が躍つてゐるではないか。その笛を吹く青年の喜び方はどうだ。感興に溢れる心を吹きこんで、細い竹の管が吹き破られてしまひさうに、管を抑へた兩の手の指が律動に顫へてゐるではないか。皆經木で編んだ帽子を、おそろひのやうにかぶつて、健康らしい黑い顏に、大人ぶつた眞面目な目つきをして、その手や肩が子供らしくはしやいでゐる。全く皆眞面目なのだ。眞面目にお祭を祝つてゐるのだ。この淋しい湖の村では、お祭の日ででもなければ、かうした賑はひを見ることはできないのであらう。それも、自分たちが太鼓を打つたり、笛を吹いたりしてつくりあげる賑はひなのだ。その賑はひに青年達は醉うてゐる。そして、もつともつと醉ふために、もつともつと賑はひをつくるために、ます〳〵力をこめて太鼓をたゝき、ます〳〵息をこめて笛を吹いてゐる。

私はこの青年等の心がかはいく思はれてならなかつた。ほんたうに淋しい若者たちだ。しかしまた、私たち都會の賑はひの中に住んでゐる者の間には、果してこの村の青年たちのやうに感興に燃える日が、一年に一日でもあるであらうか。都會には、不斷の劇場がある、音樂堂がある。觀るべきもの、聽くべきものは到る所に人を待つてゐる。けれども、そこには誰も、一人の見手として、聽手として行くのだ。耳や目を通じて、かすかに心の中にひゞく味を味はふのだ。皆が自分の心の中からほとばしる感興を合奏するといふ樂しみはない。都會の空氣は華々しいとはいへ、そこはあくどい華やかさに疲れてゐる。眞に活き〳〵とした感興を產む所ではない。さう思ふと、私はこの淋しい村の青年の心持が尊く思はれてならなかつた。

靜かに聳えてゐる妙高・黑姬、靜かにたゝへてゐるこの玲瓏とした湖、そして、綠の滴るやうな島の姿。島に鳴く蟬のすが〳〵しい聲は、青年等が吹く笛の音と調子を合はしてゐる。水の面に小波を起して吹き通る涼しい風は、青年等が打つ太鼓の音を遠くの遠くの野のはてまで傳へひろげてゐる。今、こゝ信濃の國の山また山の中にたゝへられた美しい湖の里で、自然らしく淋しく、自然らしく美しい人間の歡樂が、昔ながらの神の名と、神のためといふ形式のもとにふるまはれてゐるのである。

私たちの乘つてゐる小舟は、島の棧橋のもとに着いた。赤い鳥居と石段とがすぐ目の前に仰がれる。高い木々は低くまでこんもりと枝を垂れて、おごそかな神の淸い座(いま)し所にふさはしく、汀の砂は初秋の光に輝いてゐた。

(山水巡禮)

六家紋

沼田頼輔

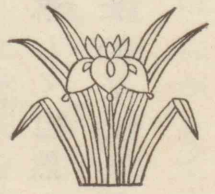
沼田頼輔
文學博士。紋章研究家。神奈川縣の人。昭和九年歿、年六十八。

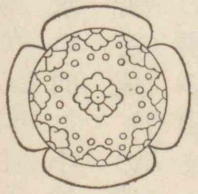
公家の家紋の起原を尋ねると、三つの原因がある。其の一は車の文様から轉じたもの、其の二は衣服の文様から轉じたもの、其の三は特別の由緒にもとづいて定められたものである。

公家の家紋が、車の文様から轉じたものであるといふことは、例へば鎌倉時代の初、近衛家は車の文様として牡丹を、花山院家は杜若を、德大寺家は窠を用ひた如きであるが、後世に至ると、これ等の文様は、いづれもその家の紋章として用ひられるに至つたのである。

衣服の文様から轉じて、その家紋となつたのは、

牡丹


杜若

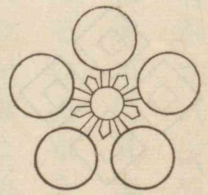

窠

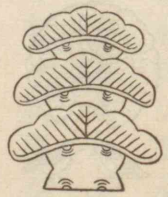
東風吹かば云々
「東風吹かば香おこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ。」

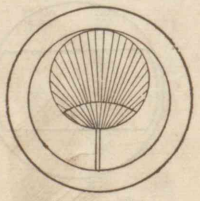
我家の龍膽襷の如きである。

又、特別の由緒にもとづいて家紋を定めたものとしては、菅原氏の梅鉢紋、若しくは三階松紋の如きがその例と見るべきである。菅公が梅を愛せられた事は名高いものであつて、「東風吹かば」の歌詠や、紅梅殿の書屋、その他一夜松の故事の如きは、最も人口に膾炙してゐる事柄である。從つて菅公の子孫から出たものが、家紋を定める場合に、右の如き紋章を定めて祖先を偲ぶといふが如きは、當然あり得べきことと思はれる。

武家の家紋は、主として旗及び幕の徽號から起つたものであるが、又、公家の家紋の如く、衣服の文様から轉じて、その家紋となつたものもある。


梅鉢

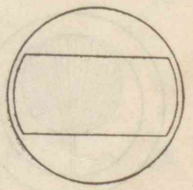

三階松


團扇

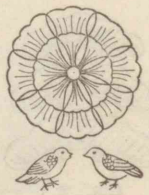
源平時代に於て、源氏は白旗・白符を用ひ、平家は赤旗・赤符を用ひ、武家の棟梁たるものは、未だ紋章を用ひなかつたのであるが、その旗下に屬してゐた諸國の武士の中には、既に自家の目標として、旗に紋章を据ゑたものがあつた。例へば、武藏の兒玉黨が旗に團扇の紋を据ゑた如きがこれである。

幕の紋から轉じたものを擧げると、新田氏の大中黑、足利氏の二引兩、三浦氏の三引兩の紋の如きで、その形狀から見ても、明らかにこれを知ることができるのである。

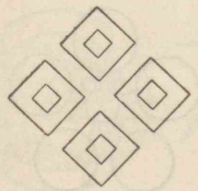
衣服の文樣から轉じて家紋となつた一例を擧げると、熊谷氏の鳩に寓生紋、佐々木氏の目結紋の如きがこれである。



大中黑



鳩に寓生

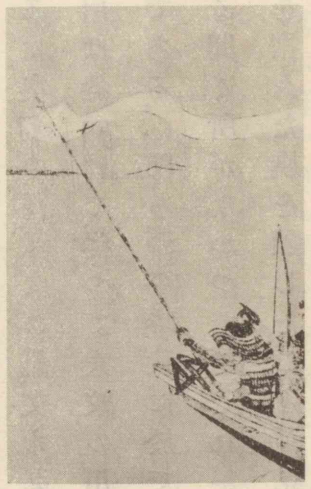


目結

公家の家紋は武家に比して早く開けたのであるが、その發達は、却つて武家に比べて後れたのである。殊に鎌倉幕府創立以後、公家は次第に政權に遠ざかつたのみならず、その家紋は輿車・馬具等にのみ用ひられたに拘らず、足利時代以後に至つては、その輿車を用ひることも亦廢れたので、從つて公家に關する家紋の記事は、殆ど跡を記錄に絕つたのである。これに反して、武家の家紋は、旗及び幕に用ひられ、時人の視聽に觸れることが次第に多くなり、加ふるに奧羽の役、承久の亂、文永・弘安の國難等が相繼いで起り、旗幕の用は益〻開けて、從つて家紋の用は一般に流布することとなつたのである。即ち源平時代に於て、武士の家紋を用ひたものは、未だ多く聞く所がなかつたが、それが承久の頃になると、既に家々の家紋を据ゑた旗を飜したことが見えてゐる。さうして、當時この家紋を用ひたものは、鎌倉武士ばかりではなく、西國の武士も亦侔しく

元弘・建武
後醍醐天皇の御宇（一九九―一九九九）。

家紋を用ひたものであつて、これ等の事實は、蒙古襲來繪卷に據つて、九州の豪族が、いづれも家紋を据ゑた旗を掲げてゐるのを見ても、容易に知ることができるのである。



蒙古襲來繪卷

元弘・建武の頃より、吉野朝の頃になると、天下の諸豪は一般に家紋を用ひることとなつた。皇室の御紋章たる菊・桐も、鎌倉時代より既に用ひられたのであるが、當時はこれを私紋として衣服・器財にのみ据ゑられて、公の場合には日月の御紋を用ひられたのである。然るに、吉野朝の頃に至ると、これを御紋章として用ひ給ひ、有功の將士には、時としてこれを下賜せられた。足利氏が菊・桐の紋を用ひたのも、後醍醐天皇からこれを拜領したものであると傳へられてゐる。

永祿四年
正親町天皇の御宇（一三三）。

元和
後水尾天皇の御宇（一三五―一三八三）。

戰國時代に至り、群雄割據して兼併を事とするに及んで、地方に於ける諸家の紋章を知ることは、主將としてその統率上必要な事であつたので、稀には武將にして、その地方豪族の家紋を蒐錄せしめたのもあつた。上杉伯爵家に傳へてある關東幕注文の如きは、永祿四年上杉謙信の蒐錄せしめたものであつて、その範圍は、上野・下野を中心として、武藏・安房・上總・下總・常陸に及び、二百五十一家の紋章を收めてある。當時に於ける關東北部諸豪の家紋は、これに依つて略〻窺ふことができるのである。

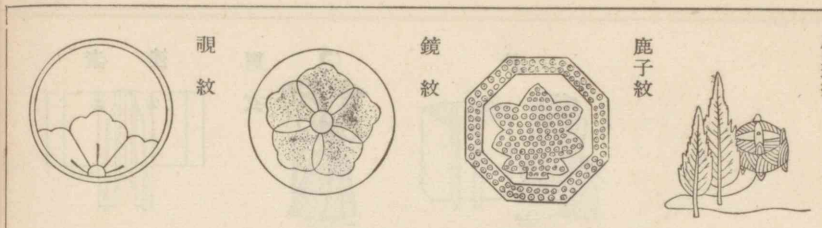
應仁の頃、旗の外に幟を用ひることが始り、以後家紋の用は愈〻その範圍を廣めることとなつた。然るに、德川時代に至り、元和以降、兵革が全く收つたので、旗・幟・馬標の如きは、その必要がなくなつた。從つて、紋章の用途も革つて、これより紋章は主として威儀を正すために用ひられることとなつたのである。殊に參勤交替の制が

定つてからは、諸大名が江戸に往來する場合、若しくは登城する場合に、その苗字を表す必要からして、その服裝には、束帶の外は必ず家紋を据ゑたのである。　さうして、この頃は家格・門地によつて禮儀作法が異なつたから、途上で遭遇の場合には、豫め紋章を知つて置く必要があつたので、その從士中には、必ず諸大名の家紋を熟知してゐるものを備へて、その遭遇する諸大名の何人であるかを知つて、これに對する禮儀作法に失體のないやうに注意したものである。　殊に幕府にては、これがために下座見役を大手門に居らせて、家紋若しくは槍印を見て、登城する所の諸大名の何人であるかを豫知せしめたものである。

從來家紋は、主として旗幕に据ゑられたのであるが、戰國時代の末、豐臣秀吉が聚樂第・大阪城・伏見城を經營するに及んで、これに菊・桐の紋章を据ゑたので、これより建築物に家紋を据ゑることが流

行し、德川時代に、江戸を始め、諸大名の居城には、大率その家紋を据ゑることが行はれた。　また戰國時代より素襖・肩衣の服制が起り、これにも亦紋を据ゑることになり、諸大名・旗本の士は、通常禮服として裃を用ひ、これに三つ所・五つ所の如く位置を定めて家紋を据ゑたので、紋章の形狀は大率對稱的のものとなり、從つて丸を附けることがこの時代に入つて一般に行はれることとなつて、これがために紋章に一段の進歩を來したのである。

元和偃武以後、太平の續くにつれて、奢侈の風が行はれ、中にも衣服は殊に華美を盡くし、從來苗字の目標であると共に、威儀を整へるために用ひられた家紋は、この頃からして、主として裝飾に用ひられる傾向を生じ、或は從來用ひ來つた家紋を廢して、新たに優美な紋章を作つてこれに代へることなどが行はれるやうになつたのである。



以上は大名・旗本に就いてのことであるが、普通の人民に至つては、更にこれより甚だしかつたのである。即ち伊達紋・加賀紋・鹿子紋・鏡紋・比翼紋・覗紋・崩紋等の起つたのもこの時代からである。

かゝる事情であつたので、この時代の家紋は、全く苗字の目標である性質を失つて、優美を競ひ、技巧を衒ふ一種の裝飾用となつた。

王政維新以後、泰西の風俗を模倣した結果、洋服が行はれて、家紋の使用は次第に衰へるやうになつたが、輓近に至り、國民の通常禮服は、白襟黑紋附を用ひることとなつたので、幾分か紋章を重んずるやうになつて來た。併し、なほ德川時代の餘弊を受けて、その目的は殆ど裝飾に止り、徒らに優美を衒つて、擅にこれを改廢するやうな傾向があるのは、時勢の然らしむる所とはいひながら、歎かはしいことである。

（日本紋章學）

遲塚麗水
名は金太郎。文章家。靜岡縣の人。明治元年生。

ケーナリ
アフリカの西北海にあるカナリー島が原產地だといふ

七 朝鮮の四季

遲塚麗水

朝鮮の春は、李の花でもなく、杏の花でもなく、梨の花でも、桃の花でもなく、無論櫻の花でもない。朗らかに明るい鬱金の花をもつ連翹こそは、げに朝鮮の春を象徵する花である。京城なる李王家祕苑はいふまでもなく、通邑大都の門巷籬落、そこに黃金の色麗らかな連翹の盈々たる細條、輕く軟風に吹き靡いて、嫩き春の光に陶醉するやうな風情に見えることによつて、始めて春が來たといふ心を催させる。この國ではこの花を迎春花といふ。正しくその名にふさはしい。俗間ではケーナリと呼ぶ、その花の色が金絲雀に似てゐるので、しか呼ばれてゐるのであらう。金絲雀は德川幕府の頃朝鮮の信使が携へ還つたものである。土俗、この花と葉とを胡麻油に漬けて、腫瘡や毒蟲にさゝれた時に、塗抹して奇效があ

三十餘年前云々
明治二十七年。

ると傳へてゐる。

河に濯ぐ

朝鮮の夏は正に白楊（ポプラ）の夏である。水村山郭、處として丈け高き白楊の、薫風に嘯嗷してゐるのを見ないことはない。枝に鵲の巣を藏してゐるなどは、詩趣あり又畫趣ありといふべきである。私の始めて朝鮮に渡航したのは、三十餘年前、征清役に從軍した時である。何處へ行つても童山禿丘、絶えて樹らしい樹に逢着することはなかつたが、今來て見れば、到る處翠阜蒼丘、扶疎たる松の林さへ、その樹の既に拱するに餘りあるを見る。その白楊の殊に

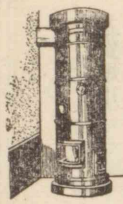
朝鮮の農家

多き事は、この樹の成育、他の木に比すれば最も速かに、五年にして屋根の垂木となすに足り、十年にして棟梁となすに堪ふるに見て、併合當初の有司は特にこの木の栽植を奬勵したものであらうと思はれる。

秋の朝鮮は、正に蕃椒の秋と云ふべきである。金風郊墟に入るの時、一度城外におとづれると、村家の草葺屋根の上、殷紅、火よりもあかいこの蕃椒の一面に並べ乾されてあるを見る。支那人が韮・大蒜を嗜むが如く、朝鮮の人は更に尤も蕃椒を嗜む。料理にも香の物にも、この物なければ旨しとしない。落日、山

にあり、反照雲を爛らす時、水村山郭、一樣農家の屋根に乾されたこの蕃椒の紅酣し、硃燃ゆるの光景は、誠に綺麗な眺である。内地には昔、この物なく、この物あるは豐公の征韓役後より始るといふ。正しく出征の武士が、その種子を燧石袋の中に收めて持還つたものであらう。されば、これを唐辛といひ、更に又高麗胡椒ともいふ。昔、内地の飛脚が深雪のうちを行く時、この物を足袋のうちに入れて凍傷を防いだといふくらゐ、烈寒の地に生を寄せてゐる人たちは、この物を食うて寒氣を攘ふといふ自然の要求から、その嗜好を成したのであらうと思はれる。

明治節時分になると麥酒が凍つて壜が破裂するといふほど寒威の猛烈な朝鮮には、冬を象徴する何物をも持たないことは心寂しい。強ひてこれありとすれば、彼の溫突（ヲンドル）である。李王家の宮殿は勿論、庶民の家にも必ずあつて、冬眠の人に煦々の春を輸すので



ペーチカ
ロシヤ式の煖爐。

ある。家の床はすべて泥土で築造される。その床を作らうとする當初から、螺線型に又山路形に、若しくは巴樣に、三升形に、古來からの傳統や、自家の多年經驗し來つた工夫の施設のもとに、遍く床の面に溫氣の行き亙る樣に寶道を設け、寶道の一端は、壁外の煙突に通じ、他の一端は土間に据ゑた竈の奥に連結させて置くのである。されば日夕炊爨するその火氣は、煙と共に榮螺の殼のごとき寶道を傳つて土床を溫め、やがて屋外の煙突より放散されるのである。床には煙の室内に漏れ出づるを防ぐ爲に紙をもつて目張をなし、その上に朝鮮油團を敷く。庶民の多くは褥も敷かず固き床の上に胡坐し、奇寒膚に砭するやうな冬の夜にも、一枚の煎餅蒲團、薄い小夜具の一襲を被りて、臥するのみである。移住の内地人は、多くは煖爐又はペーチカを置いて防寒の用意をなせど、中にはやはり朝鮮風の溫突室も造つてゐる。京城その他都會の内地人

志賀矧川
名は重昂。地理學者。文筆に長ず。愛知縣の人。昭和二年歿、年六十五。

神仙爐

向きの貸家は、その一室には必ず溫突の設備があるやうになつたといふ。東京でも、曾て亡友志賀矧川氏が、代々木の邸の一室を溫突式となし、年の暮、その溫突開きの當夜、知人數輩を招いて朝鮮料理を饗應したことがある。私も亦招かれた客の一人であつたが、折からの微雪、窓邊の竹に洒いで、寒さの殊に酷だしい宵ではあつたが、坐間には唯喫煙用の煙草盆があるのみで、絶えて火氣のなかつたに拘らず、和やかな溫氣は危坐の膝を煖めて、人をして覺えず睡を催さしむる美慵を感じた。さてくさ〴〵の料理の出た後、最後の神仙爐を圍んだ時には、溫か過ぎて、額に薄汗のにじみ出づるを覺えた程であつた。文筆に携はる人の讀書述作の室か、若しくは閑時閑客と面晤する閑房としては、誠に妙といふべきであるが、邦人の習慣より言へば、溫突室には久しく居るべからざるものであらうと思ふ。朝鮮の人の懶惰の習性は、或はこの溫突あるが爲

龍井村附近地圖

二百五十韓里
約九十八粁。

兀良哈
明初の頃遼東に侵入して來た部族の名。こゝでは古その部族のゐた土地のこと。

であらう。私は曾て平壤大戰を觀ての歸途、黃州から南首陽山を踰えて海州より汽船、仁川に歸つたことがある。當時年少、二百五十韓里を一日半を以て踏破した。夜中、銀波の河を徒涉し、とある河畔の客舍を叩き、水に濡れた服をも脫がず、行旅の朝鮮の人達が雜然として枕藉してゐる溫突の室に入つて、夜の明くる間の小睡を取つたが、やがて惡夢に魘はれたやうに驚き覺めると、さながら新たに蒸甑の中より出でたる甘藷の如く、白氣濛々として滿身より立昇り、流汗、膚に遍く堪ふべからざるの奇痒を覺えた。傍に臥してゐた朝鮮の人たちも立騷ぐこの物音に夢を破られ、眼を睜りて訝り眺めてゐるも道理こそ、濡れた衣服は溫突の熱氣に蒸されてかくの始末となつたのであつた。今年の春の旅行にも、會寧より圖們江を渡りて龍井村を訪づれた時、春とはいへど胡沙吹く風のまだ寒い古兀良哈（オランカイ）、旅館の主人の親切から溫突の室に幾夜を過

したが、厚衾襲ねての夜半の夢は、吾が家に居る時のやうに圓かならず、襲ねた衾をはねのけて、僅かに一枚の小夜具を被つて辛うじて眠ることを得たこともある。しかも夜明けて後の心地は、何となく濛朧として、頭の岑々と痛むを覺えたのを見れば、溫突はたしかに邦人の習性には適したものではあるまいと思ふ。さりながら、私は朝鮮の春と夏と秋とを知つて、未だ冬を知らない。寒威の酷しい朝鮮の、しかも彼の土壁、草屋、隙もる風の刀のごとき民家にあつては、この溫突あつて始めて寒き夜を凍えずに過され得ることであらう。

（滿朝趣味の旅）

太平記　四十卷。作者未詳。花園天皇の文保二年（一九八）から後村上天皇の正平二十二年（一三六七）に至る凡そ五十年間の軍記物語。

大塔宮　後醍醐天皇の第三皇子護良親王。延暦寺の大塔宮に居られたので大塔宮といふ。建武二年（一九五）足利直義の爲に弑せらる。御年二十八。

般若寺　奈良市外にある。

主上　後醍醐天皇。

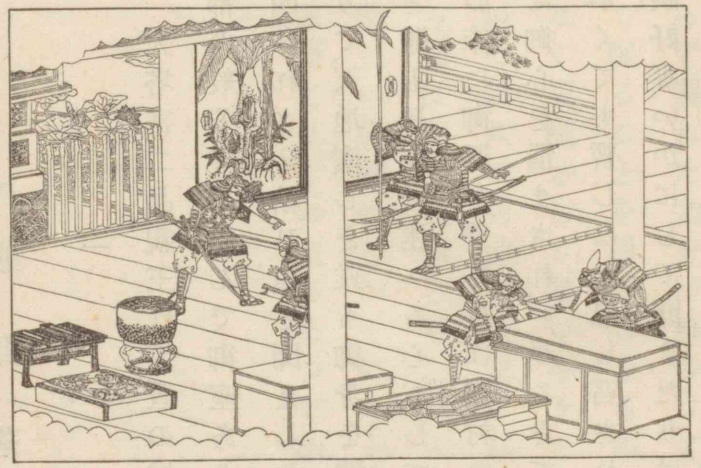
一乘院　奈良興福寺の北にあつた同寺の末寺の一。

八　熊野落

太平記

一

大塔宮二品親王は笠置の城の安否の聞し召されん爲に、暫く南都の般若寺に忍んで御座ありけるが、笠置の城すでに落ちて、主上囚はれさせ給ひぬと聞えしかば、虎の尾を履む恐れ御身の上に迫りて、天地廣しと雖も御身を隱さるべき所なし。日月明らかなりと雖も長夜に迷へる心ちして、晝は野原の草に隱れて、露に臥す鶉の床に御涙を爭ひ、夜は孤村の辻にたゝずみて、人を咎むる里の犬に御心を惱まされ、いづことても御心安かるべき所なかりければ、かくても暫しはと思し召されけるところに、一乘院の候人按察法眼好專、いかにして聞きたりけん、五百餘騎を率して、未明に般若寺へぞ寄せたりける。



大塔宮危難を免れ給ふ

をりふし宮につき奉りたる人一人もなかりければ、一防ぎ防ぎて落ちさせ給ふべきやうもなかりける上、隙間もなく兵すでに寺内に打入りたれば、紛れて御出あるべき方もなし。「さらばよし自害せん。」と思し召してすでにおしはだ脱がせ給ひたりけるが、「事かなはざらん期に臨んで腹を切らんことはいと易かるべし。もしやと隠れて見ばや。」と思し召しかへして、佛殿の方を御覽ずるに、人の讀みかけて置きたる大般

若の唐櫃三つあり、二つの櫃はいまだ蓋をあけず、一つの櫃は御經を半ばすぎ取出して、蓋をもせざりけり。この蓋をあけたる櫃の中へ、御身を縮めて伏させ給ひ、その上に御經をひきかづきて、隱形の呪を御心の中に唱へてぞおはしける。若し搜し出されなば、やがて突き立てんと思し召して、氷の如くなる刀をぬいて御腹にさし當て、兵「こゝにこそ。」といはんずる一言を待たせ給ひける御心の中、推し量るもなほ淺かるべし。

さるほどに兵、佛殿に亂れ入りて、佛壇の下、天井の上までも殘る所なく搜しけるが、餘りに索めかねて、「これ體のものこそ怪しけれ。あの大般若の櫃をあけて見よ。」とて、蓋したる櫃二つを開いて御經を取出し、底を飜して見けれどもおはせず。「蓋あきたる櫃は見る迄もなし。」とて、兵皆寺中を出で去りぬ。宮は不思議の御命をつがせ給ひ、夢に道行く心ちして、なほ櫃の中におはしけるが、若し

玄奘三藏　支那唐代の高僧。印度に入り、大部の經文を持歸り、又それを漢譯した。（西紀六〇〇—六六四）。

摩利支天　菩薩の名。

十六善神　大般若經の守護神。

熊野　紀伊國（和歌山縣）牟婁郡をひろく熊野といふ。

赤松律師　則村の第三子。延曆寺の律師。初め護良親王に從ひ、後尊氏の謀叛に與した。

村上彦四郎　義光。信濃國（長野縣）の人。元弘三年吉野城の陷らうとする時大塔宮の身代になつた。

また兵の立歸り委しく捜すこともやあらんずらんと御思案ありて、やがて前に兵の捜し見たりつる櫃に入りかはらせ給ひてぞおはしける。

案の如く、兵どもまた佛殿に立歸り、「前に蓋のあきたるを見ざりつるがおぼつかなし。」とて、御經を皆うち移して見けるが、からからと打笑ひて、「大般若の櫃の中をよく〳〵捜したれば、大塔の宮はいらせ給はで、大唐の玄奘三藏こそおはしけれ。」と戲れければ、兵皆一同に笑ひて、門外へぞ出でにける。これ偏に摩利支天の冥應、または十六善神の擁護による命なりと信心肝に銘じ、感涙御袖を潤せり。

かくては南都邊の御隱所もかなひ難ければ、則ち般若寺を御出であつて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御供の衆には光林坊玄尊・赤松律師則祐・木寺相模・岡本三河坊・武藏坊・村上彦四郎・片岡八郎・矢田彦七・平賀三郎彼此以上九人なり。宮をはじめ奉りて、御供のものまでも、皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半ばにせめ、その中に年長ぜるを先達に作り立て、田舍山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。

柿の衣　赤色で無紋の衣。

二

この君もとより龍樓鳳闕の內に人とならせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御步行の長途は定めてかなはせ給はじと、御供の人々かねては心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる踏皮・脚巾・草鞋を召して、少しもくたびれたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤、おこたらせ給はざりければ、路次に行き逢ひける道者も、勤修を積める先達も、見咎むることなかりけり。

由良の湊　紀伊國(和歌山縣)日高郡にもあるが、こゝは淡路國(兵庫縣)津名郡。和歌山對岸の港。

藤代　紀伊國(和歌山縣)海草郡にある。

和歌　紀伊國(和歌山縣)海草郡和歌の浦。

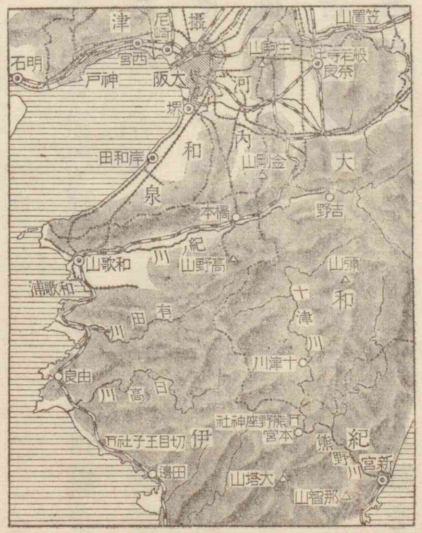
吹上・玉津島　共に同所附近。

切目の王子　切目王子社。日高郡にある。

びんづら

由良の湊を見わたせば、沖漕ぐ舟の楫を絶え、浦の濱ゆふいく重とも、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀伊路の遠山渺々と、薄紫や藤代の、松にかゝれる磯の浪、和歌・吹上をよそに見て、月に磨ける玉津島、光も今はさらでだに、長汀・曲浦の旅の路、心を碎くならひなるに、雨を含める孤村の樹、夕べを送る遠寺の鐘、哀れをもよほす時しもあれ、切目の王子に着き給ふ。

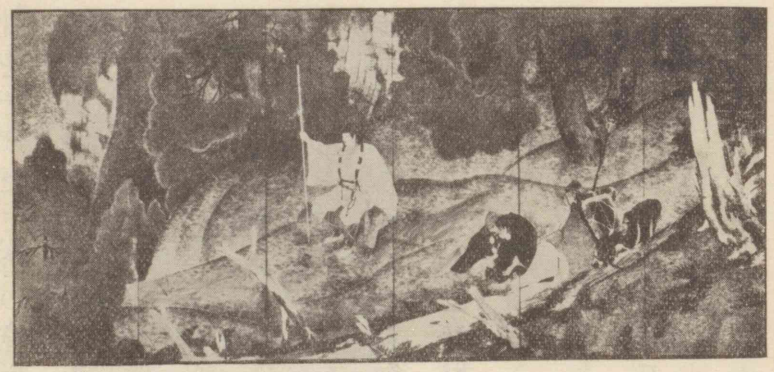
その夜は叢祠の露に御袖を片敷きて、夜もすがら祈り申させ給ひけり。丹誠無二の御勤、感應などかあらざらんと、神慮も暗に測られたり。夜もすがらの禮拜に、御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕として、暫く御まどろみありける御夢に、びんづら結ひたる童子



熊野三山　紀伊國東牟婁郡。三山は本宮・新宮・那智。

十津川　大和國(奈良縣)吉野郡。熊野川の上流。

兩所權現　本宮と新宮。



大塔宮(磯田長秋筆)

一人來て、「熊野三山の間はなほも人の心不和にして大義成りがたし。これより十津川の方へ御わたり候ひて、時の到らんを御待ち候へかし。兩所權現より案内者に附けまゐらせられて候へば、御道指南仕るべく候。」と申すと御覽ぜられて、御夢は卽ち覺めにけり。これ權現の御告げなりけりと、たのもしく思し召されければ、未明に御よろこびの奉幣をささげ、やがて十津川をたづねてぞ分け入らせ給ひける。

その道のほど三十餘里が間には、絶えて人里もなかりければ、或は高峯の雲に

枕をそばだて、苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る水に渇を忍びて、朽ちたる橋に肝を消す。　山路もとより雨なうして、空翠常に衣を濕す。見上ぐれば萬仞の青壁劍に削り、見おろせば千丈の碧潭藍に染めり。　數日の間かゝる嶮難を經させ給へば、御身もくたびれはてて流るゝ汗水の如く、御足は缺け損じて草鞋皆血に染まれり。　御供の人々もその身鐵石にあらざれば、皆饑ゑ疲れて、はか〴〵しくも歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手を挽いて、路のほど十三日に、十津川にぞ着かせ給ひける。

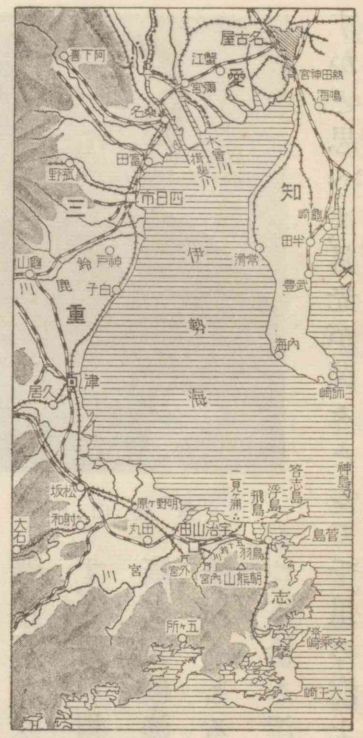
田山花袋
名は錄彌。小說家。群馬縣の人。昭和五年歿、年六十。

九　伊勢・志摩の海

田山花袋

南歐の風光、地中海の大觀を見馴れた西洋人でも、日本の海岸美には一驚を喫せずには居られないさうだ。　その日本の沿海の美、その美の最も遺憾なく發揮されて居る處は決して少くあるまいが、自分の見た中では、伊勢の海からかけて志摩・紀伊の沿岸に如く處はない。　優美に傾かず、凄涼に過ぎず、さりとて甚だ平凡に陷らず、港灣が相接し、島嶼が相連なり、斷江・荒磯・漁村・蜑戸、燈臺もあれば松原もある。　海水が深く陸に入つて、恰も溪流のやうな入江をなすかと思へば、月光が閃々として千里の海上を照らし、斜に欹つた

田山花袋



伊良湖村
一端は伊良湖岬となり、愛知縣の知多半島の師崎と相對してゐる。

暗に富み、空想に富んで居ることだらう。自分は嘗て三河國の最南端、渥美郡の一角、伊良湖村の絶端にある古山といふ山の上に立つて、一眸の下に伊勢志摩の海を見渡したことがあつた。夏だつたが、日は一時間ほど前に遠く向ふに打渡された伊勢朝熊連山の陰に落ちて、一時美しく西の空を彩つてゐた種々の形や種々の色の面白い夕べの雲も、いつ消えて行くともなく消え果てて、もう薄暗い夕暮の光が、何處ともなく暗碧の波の上に寄せてゐた。

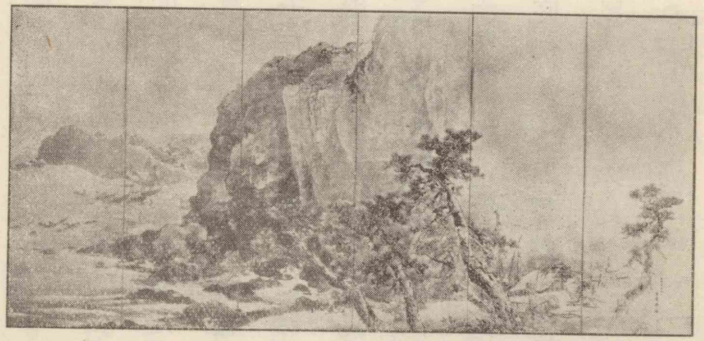
一帆の片影の遠く雲外に消える光景など、殆ど應接に遑がないといつてもよい。

伊勢志摩の海！

いかに變化に富み、明

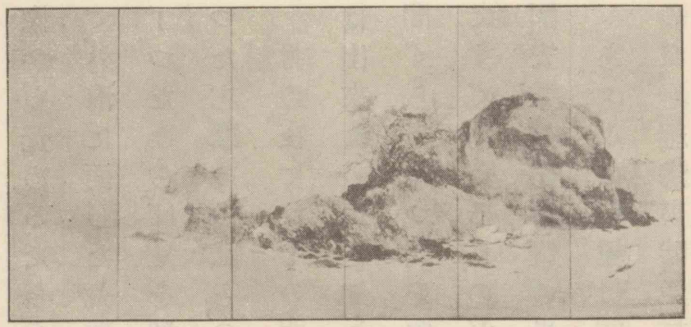
見渡すかぎり、舟といふ舟、帆といふ帆は一つもなく、たゞ海の處處に白く碎ける波の頭が見えるばかりで、その淋しさといつたらなかつた。左の方に、海上一里ばかりを隔てて神島が見える。丁度甕を倒さまにしたやうなので、一名甕島ともいふさうだが、この島は行つて見るとなか〳〵風情に富んで居る。西の山陰に五六十戸の漁村、そこには桂光院といふ寺、その寺の一室を借りた村役場。それからその島を廻つて東に行くと、怒濤が天を呑まうとするやうな絶海に臨んで、絶大な洞窟の奇觀、滿潮毎にその中に呑吐する海水の響は、恰も巨人が天に向つて叫ぶやうで、その壯觀は到底都人士の想像し得るところでない。神島の少し右方に當つて黑い〳〵大島の影、それは志摩の答志島だ。菅島・飛島、その他無數の大島・小島。

日は漸く暮れて、海の色は愈〻黑く、その上に浮かぶ島々の影も微



志摩の海

かに、星の瞬、遠海の囁、遠山の姿、自分は深い深い空想に耽つた。「平和！人の世の平和とは抑何ぞや。」自分はかう叫んだ。平和を望む心、平和を欲する念、遂にこれおのれの弱きを表白して居るではあるまいか。見よ、この自然を。見よ、この大觀を。海は四方から來て陸を呑まうとし、陸はこれを拒ぐべく全力を盡くして居るではないか。島・岩・岸、此等は皆陸の遺して以て海の怒濤を拒がせるものではあるまいか。けれども、海は時の永久の力を藉りて、次第に陸を侵蝕し、島を崩し、岩を碎き、岸を陷れて、漸次陸の運命を縮めつゝあるのではあるまい



（田南岳璋筆）

か。

「戰鬪！」と自分は叫んだ。實際この伊勢の海の大觀に接すると、誰でも戰鬪といふ感を起さずには居られまい。水と陸と波と山とが、いかにも互に刃を交へて居るやうに配置されて、伊勢の内海はまるで海水に攻め落されたやう。その海門を守る諸島の影は、孤城落日の狀態に陷りつゝ、なほ陸のために節を守つて奮鬪して居るやうに思はれるのだ。

若し人が、自分が空想に耽つたやうに、その古山の一角に立つて、薄暮の影の四方に滿ち渡るのも知らずにゐたならば、千鳥の

淋しげに鳴く聲が、歌のやうにその耳を掠めるので、覺えずその恍惚から覺めるだらう。　その時は、影の低いばら〳〵松の間を過ぎて、外海に面した荒磯の方へ辿り行くがよい。　そして、松原を出て了つたならば、足を留めて神島とその向ふに遠く微かに連なり渡つた志摩の山脈との間を見るがよい。

月の夜には、その明らかな光に紛れて、それと分明に見出すことは出來ないかも知れないが、闇の夜には、物凄い波の上に、大凡一分間ぐらゐづつ間を隔てて、線香花火のやうにぴかつと光つて、そしてすぐ消えるものがあるだらう。　何だと思ふ。　燈明崎――志摩國安乘（あのり）の廻轉燈の光だ。

あゝ、この詩趣に富んだ燈臺、自分は殆ど想像するにも堪へないのだ。　絶海の畔、漁村を距たること數町、磯馴松（そなれまつ）が風に吹かれて、皆面白く斜に捻れて居る半島の絶端、懸崖千丈、暴風雨の荒れる夜などは、怒濤の響、松の響、海の鳴る響、風雨の吼える響、それらの凄じい力に殆ど燈臺が吹き飛ばされて了ひはしないだらうかと疑はれるばかりのその燈臺に、若い空想がちな青年、さうでなければ、年老いて世の荒波に漂ひ果てた老爺、それが、靜かに穩やかに、世の中ではとても見ることの出來ない悠揚たる態度で、海に惱む船人のために、その夜毎々々の勤を怠らない淋しい生活。　どんなに空想に乏しい人でも、これを見ては必ずさま〴〵の想像を起さずには居られまい。

（草枕・旅すがた）

伊良子清白
名は暉造。醫師。詩人。鳥取縣の人。明治十年生。

一〇 安乘の稚兒

伊良子清白

志摩の果、安乘の小村、
はやて風岩をどよもし、
柳道木木を根こじて、
靈空飛ぶ斷れの細葉。

水底の泥を逆上げ、
かきにごす海の病、
そそり立つ波の大鋸、
よげとこそ船を待つらめ。

とある家に飯蒸せかへり、

男もあらず女も出で行きて、
稚兒ひとり小籠に坐り、
ほほゑみて海に對へり。

荒壁の小家一村、
反響する心と心、
稚兒ひとり恐怖を知らず、
ほほゑみて海に對へり。

いみじくも貴き景色、
今もなほ胸にぞ跳る。
少くして人と行きたる
志摩の果、安乘の小村。

（孔雀船）

森鷗外
名は林太郎。文學博士。醫學博士。元陸軍軍醫總監。元帝室博物館館長。島根縣の人。大正十一年歿、年六十三。

石浦
丹後國(京都府)加佐郡由良町字石浦、山椒大夫の屋敷跡といふのがある。

由良の湊
舞鶴と宮津との中間にある小港。

大雲川
由良川ともいふ。福知山の方から來て由良の港に注ぐ。

中山
大雲川の右岸、由良の南。

岩代
安壽及び厨子王の生國。

一　安壽と厨子王

森　鷗外

安壽は山の頂に立つて、南の方をじつと見てゐる。目は、石浦を經て由良の湊に注ぐ大雲川の上流をたどつて、一里ばかり隔つた川向ふに、こんもりと茂つた木立の中から、塔の尖の見える中山に止つた。そして「厨子王や。」と弟を呼びかけた。

「わたしが久しい前から考へ事をしてゐて、お前ともいつもの樣に話をしないのを變だと思つてゐたでせうね。もうけふは柴なんぞは刈らなくても好いから、わたしの言ふ事をよくお聞き。あの中山を越して往けば、都がもう近いのだよ。筑紫へ往くのはむづかしいし、引返して佐渡へ渡るのも、たやすい事ではないけれど、都へはきつと往かれます。おかあ樣と御一緒に岩代を出てから、わたしどもは恐しい人にばかり出逢つたが、人の運が

おとう樣
陸奥掾平正氏。十一年前筑紫の安樂寺へいつたきり消息が絶えてしまつた。

開けるものなら、善い人に出逢はぬにも限りません。お前はこれから思ひ切つて、此の土地を逃げのびて、どうぞ都へ上つておくれ。神佛のお導きで、善い人にさへ出逢つたら、筑紫へお下りになつたおとう樣のお身の上も知れよう。佐渡へおかあ樣のお迎へに往くことも出來よう。籠や鎌は棄てて置いて、樏子だけ持つて往くのだよ。」

厨子王は默つて聞いてゐたが、涙が頰を傳つて流れて來た。

「そして、ねえさん、あなたはどうしようといふのです。」

「わたしの事は構はないで、お前一人でする事を、わたしと一緒にする積りでしておくれ。おとう樣にもお目に懸り、おかあ樣をも島からお連れ申した上で、わたしをたすけに來ておくれ。」

「でも、わたしがゐなくなつたら、あなたをひどい目に逢はせませう。」

恐しい夢
安壽と厨子王とは或夜同じ夢を見た。それはこゝから逃げ出さうと企てる者が科せられる烙印の刑をば、安壽が受けるといふ夢であつた。

あの人たち
山椒大夫及びその一味の者ども。

厨子王が心には烙印をせられた恐しい夢が浮かぶ。

「それはいぢめるかも知れないがね、わたしは我慢して見せます。金で買つた婢をあの人たちは殺しはしません。多分お前がゐなくなつたら、わたしを二人前働かせようとするでせう。お前の教へてくれた木立の處で、わたしは柴を澤山刈ります。六荷までは刈れないでも、四荷でも五荷でも刈りませう。さあ、あそこまでおりて行つて、籠や鎌をあそこに置いて、お前を麓へ送つて上げよう。」

かういつて、安壽は先に立つておりて行く。

厨子王はなんとも思ひ定めかねて、ぼんやりして附いておりる。姉は今年十五になり、弟は十三になつてゐるが、女は早くおとなびて、その上ものに憑かれたやうに、聰く賢しくなつてゐるので、厨子王は姉の言葉に背くことが出來ぬのである。

和江
大雲川の左岸中山の向ひ、由良の南六粁にある。

木立の處までおりて、二人は籠と鎌を落葉の上に置いた。姉は守本尊を取出して、それを弟の手に渡した。

「これは大事なお守だが、今度逢ふまでお前に預けます。此の地藏樣をわたしだと思つて、護刀と一緒にして、大事に持つてゐておくれ。」

「でも、ねえさんにお守がなくては。」

「いゝえ。わたしよりはあぶない目に逢ふお前にお守を預けます。晩にお前が歸らないと、きつと討手が懸ります。お前が幾ら急いでも、あたり前に逃げて行つては、追ひ附かれるにきまつてゐます。さつき見た川の上手を和江といふ處まで往つて、首尾好く人に見附けられずに、向ふ河岸へ越してしまへば、中山までもう近い。そこへ往つたら、あの塔の見えてゐたお寺に、這入つて隱しておもらひ。暫くあそこに隱れてゐて、討手が歸つて

來たあとで寺を逃げておいで。」
「でも、お寺の坊さんが隱して置いてくれるでせうか。」
「さあ、それが運だめしだよ。開ける運なら、坊さんがお前を隱してくれませう。」
「さうですね。ねえさんの今日おつしやる事は、まるで神樣か佛樣がおつしやるやうです。わたしは考へをきめました。なんでもねえさんのおつしやる通りにします。」
「おう、好く聽いておくれだ。坊さんは善い人で、きつとお前を隱してくれます。」
「さうです。わたしにもさうらしく思はれて來ました。逃げて都へも往かれます。おとう樣やおかあ樣にも逢はれます。ねえさんのお迎へにも來られます。」
厨子王の目が姉と同じ樣に輝いて來た。

「さあ、麓まで一緒に行くから、早くおいで。」
二人は急いで山をおりた。足の運びも前とは違つて、姉の熱した心持が、暗示の樣に弟に移つていつたかと思はれる。泉の涌く處へ來た。姉は樏子に添へてある木の椀を出して、清水を汲んだ。
「これがお前の門出を祝ふお酒だよ。」かういつて、一口飲んで弟にさした。弟は椀を飲みほした。
「そんならねえさん。御機嫌好う。きつと人に見附からずに、中山まで參ります。」
厨子王は十歩ばかり殘つてゐた坂道を、一走りに駈けおりて、沼に沿うて街道に出た。そして大雲川の岸を上手へ向つて急ぐのである。
安壽は泉の畔に立つて、並木の松に隱れては又現れる後影を小さくなるまで見送つた。そして日は漸く午に近づくのに、山に登

山椒大夫　由良の石浦にゐた長者。

三郎　山椒大夫の三男。五子のうち三郎が最も亂暴であつた。

らうともしない。幸に今日は此の方角の山で木を樵る人がないと見えて、坂道に立つて時を過す安壽を見咎めるものもなかつた。

後に同胞（きやうだい）を捜しに出た山椒大夫の討手が、坂の下の沼の端で小さい藁履を一足拾つた。それは安壽の履であつた。

中山の國分寺の山門に、松明の火影が亂れて、大勢の人が籠み入つて來る。先に立つたのは、白柄の薙刀を手挾んだ山椒大夫の息子三郎である。

三郎は堂の前に立つて大聲に言つた。

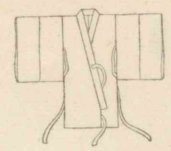
「これへ參つたのは石浦の山椒大夫が族のものぢや。大夫が使ふ奴の一人が此の山に逃げ込んだのをたしかに認めたものがある。隠れ場は寺内より外にはない。すぐにこゝへ出して貰はう。」

附いて來た大勢が、「さあ出して貰はう、出して貰はう。」と叫んだ。

本堂の前から門の外まで、廣い石疊が續いてゐる。其の石の上には、今手に〳〵松明を持つた三郎の手のものが押合つてゐる。又石疊の兩側には、境内に住んでゐる限りの僧俗が、殆ど一人も殘らず簇（むらが）つてゐる。これは討手の群が門外で騒いだ時、内陣からも、庫裡（くり）からも、何事が起つたかと怪しんで出て來たのである。

初、討手が門外から門をあけいと叫んだ時、あけて入れたら亂暴をせられはしまいかと心配して、あけまいとした僧侶が多かつた。それを住持曇猛律師（どんみやうりつし）があけさせた。併し今、三郎が大聲で逃げた奴を出せといふのに、本堂は戸を閉ぢた儘、暫くの間ひつそりしてゐる。

三郎は足踏をして、同じ事を二三度繰り返した。手のものの中から「和尚さん、どうしたのだ。」と呼ぶものがある。それに短い笑



偏衫

ひ聲が交る。

やうくの事で本堂の戸が靜かにあいた。曇猛律師が自分であけたのである。律師は偏衫一つ身に纏つて、なんの威儀をも繕はず、常燈明の薄明りを背にして本堂の階の上に立つた。丈の高い岩乘な體と眉のまだ黑い廉張つた顏とが、搖めく火に照らし出された。律師はまだ五十歳を越したばかりである。

律師は徐に口を開いた。騷がしい討手の者も、律師の姿を見ただけで默つたので、聲は隅々まで聞えた。

「逃げた下人を搜しに來られたのぢやな。當山では住持のわしに言はずに人は泊めぬ。わしが知らぬから、その者は當山にゐぬ。それはそれとして、夜陰に劍戟を執つて、多人數押寄せて參られ、山門をあけいといはれた。さては國に大亂でも起つたか、公の叛逆人でも出來たかと思うて、山門をあけさせた。それに

東大寺
奈良市にある、華嚴宗の大本山。聖武天皇の創建。勅願寺。第三課參照。

なんぢや。御身が家の下人の詮議か。當山は勅願の寺院で、山門には勅額を懸け、七重の塔には宸翰金字の經文が藏めてある。こゝで狼藉を働かれると、國守は檢校の責を問はれるのぢや。又總本山東大寺に訴へたら、都からどのやうな御沙汰があらうやも知れぬ。そこを好う思うて見て、早う引取られたが好からう。惡い事は言はぬ。お身たちの爲ぢや。」

かういつて、律師はしづかに戸を締めた。

三郎は本堂の戸を睨んで齒咬をした。併し、戸を打破つて踏み込むだけの勇氣もなかつた。手のものどもは唯風に木の葉のざわつくやうに囁きかはしてゐる。

此の時大聲で叫ぶものがあつた。「その逃げたといふのは、十二三の小わつぱぢやらう。それならわしが知つてゐる。」三郎は驚いて聲の主を見た。父の山椒大夫に見紛ふ樣な親爺で、此の寺の

鐘樓守である。親爺は詞を繼いで言つた。

「そのわつぱはな、わしが午頃鐘樓から見てゐると、ついぢの外を通つて南へ急いだ。かよわいかはりには身が輕い。もう大分の道を行つたぢやろ。」

「それぢや。半日に童の行く道は知れたものぢや。續け。」

といつて、三郎は取つて返した。

松明の行列が寺の門を出て、ついぢの外を南へ行くのを、鐘樓守は鐘樓から見て、大聲で笑つた。近い木立の中で、やう〳〵落着いて寢ようとした鴉が二三羽、又驚いて飛び立つた。

あくる日に國分寺からは諸方へ人が出た。石浦に往つたものは、安壽の入水の事を聞いて來た。南の方へ往つたものは、三郎の率ゐた討手が田邊まで往つて引返した事を聞いて來た。

田邊
今の京都府加佐郡舞鶴町。

中二日置いて、曇猛律師は田邊の方へ向いて寺を出た。盥ほどある鐵の受糧器を持つて、腕の太さの錫杖を衝いてゐる。跡からは頭を剃りこくつて三衣を着た厨子王が附いて行く。

二人は眞晝に街道を歩いて、夜は處々の寺に泊つた。山城の朱雀野に來て、律師は權現堂で休んで、厨子王に別れた。

「守本尊を大切にして往け、父母の消息はきつと知れる。」と言ひ聞かせて、律師は踵を旋した。亡くなつた姉と同じ事を言ふ坊樣だと厨子王は思つた。

都に上つた厨子王は、僧形になつてゐるので、東山の清水寺に泊つた。籠堂に寢て、あくる朝目が覺めると、直衣（なほし）に烏帽子を着て指貫を穿いた老人が枕元に立つてゐた。

「お前は誰の子ぢや。何か大切な物を持つてゐるなら、どうぞ己（おれ）に見せてくれい。己は娘の病氣の平癒を祈るために、ゆうべこ

朱雀野
昔の京都の西部、朱雀大路の附近。

清水寺
京都市東山區にある法相宗の寺。四國十六番の札所。

直衣　烏帽子

師實
關白藤原師實。後冷泉・後三條・白河・堀河四天皇に仕へ、白河天皇の承保二年(一〇七五)關白となる。堀河天皇の康和三年(一一〇一)歿、年六十。

安樂寺
今の福岡縣(筑前國)筑紫郡太宰府町太宰府神社の地にあつた。

こに參籠した。すると夢にお告げがあつた。左の格子に寢てゐる童が好い守本尊を持つてゐる。それを借りて拜ませいといふ事ぢや。けさ左の格子に來て見れば、お前がゐる。どうぞ己に身の上を明かして、守本尊を貸してくれい。己は關白師實ぢや。」

厨子王はいつた。

「私は陸奥掾正氏といふものの子でございます。父は十二年前筑紫の安樂寺へ往つたきり歸らぬさうでございます。母は其の年に生まれた私と三つになる姉とを連れて、岩代の信夫郡に住むことになりました。そのうち私がだいぶ大きくなつたので、姉と私を連れて、父を尋ねに旅立ちました。越後まで出ますと、恐しい人買に取られて、母は佐渡へ、姉と私は丹後の由良へ賣られました。姉は由良でなくなりました。私の持つてゐる此

放光地藏菩薩
五穀成就の願を旨とする地藏菩薩。

高見王
桓武天皇の皇子葛原親王の御子、平氏の祖。

永保
白河天皇の御代(一〇八一―一〇八三)。

の守本尊は地藏樣でございます。」

かういつて守本尊を見せた。

師實は佛像を手に取つて、先づ額に當てるやうにして禮をした。それから面背を打返し〳〵丁寧に見ていつた。

「これはかねて聞き及んだ尊い放光地藏菩薩の金像ぢや。百濟國から渡つたのを、高見王が持佛にしておいでなされた。これを持傳へてをるからは、お前の家柄に紛れはない。仙洞がまだ御位にをらせられた永保の初に、國守の違格に連坐して筑紫へ左遷された平正氏が嫡子に相違あるまい。若し還俗の望があるなら、追つては受領の御沙汰もあらう。先づ當分は己の家の客にする。己と一緒に館へ來い。」

師實は厨子王に還俗させて、自分で冠を加へた。同時に正氏が

謫所へ、赦免狀を持たせて、安否を問ひに使を遣つた。併し此の使が往つた時は、正氏はもう死んでゐた。元服して正道と名告つてゐる厨子王は、身が窶れる程歎いた。

其の年の秋の除目に、正道は丹後の國守にせられた。國守は最初の政として、丹後一國で人の賣買を禁じた。そこで山椒大夫も悉く奴婢を解放して、給料を拂ふことにした。

大夫の家では一時それを大きな損失のやうに思つたが、此の時から農民も工匠の業も前に增して盛んになつて、一族は愈〻富み榮えた。國守の恩人曇猛律師は僧都にせられ、安壽が亡き迹は懇に弔はれ、又入水した沼の畔には尼寺が立つことになつた。正道は任國のためにこれだけの事をして置いて、特に休暇を申し請うて、微行して佐渡へ渡つた。

佐渡の國府は雜太といふ處にある。正道はそこへ往つて、役人

雜太　佐渡國（新潟縣）雜太郡、今の佐渡郡雜太町。佐渡島の中部、國府川のほとり。

の手で國中を調べて貰つたが、母の行方は容易に知れなかつた。

或日正道は思案に暮れながら、一人旅館を出て市中を歩いた。そのうち、いつか人家の立並んだ處を離れて、畑中の道に懸つた。空は好く晴れて、日があかゝと照つてゐる。正道は心の中に、どうしておかあ樣の行方が知れないのだらう、若し役人なんぞに調べさせて、自分が搜し歩かぬのを神佛が憎んで、逢はせて下さらないのではあるまいか。」などと思ひながら歩いてゐる。ふと見れば、だいぶ大きな百姓家がある。家の南側の疎らな生垣の內が、土を敲き固めた廣場になつてゐて、其の上に一面に蓆が敷いてある。蓆には刈り取つた粟の穗が干してある。その眞中に、襤褸を着た女が坐つて、手に長い竿を持つて、雀の來て啄むのを逐つてゐる。女は何やら歌のやうな調子でつぶやく。

正道はなぜか知らず、此の女に心が牽かれて、立止つて覗いた。

女の亂れた髪は塵に塗（まみ）れてゐる。顔を見れば盲である。正道はひどくあはれに思つた。そのうち女の呟（つぶや）いてゐる詞が、次第に耳に慣れて聞き分けられて來た。それと同時に、正道は瘧（おこり）病のやうに身内が震つて、目には涙が涌いて來た。女はかういふ詞を繰り返して呟いてゐたのである。

安壽戀しや、ほうやれほ。
厨子王戀しや、ほうやれほ。
鳥も生あるものなれば、
疾う〳〵逃げよ、逐はずとも。

正道はうつとりとなつて、此の詞に聞き惚れた。そのうち臓腑が煮え返るやうになつて、獸めいた叫が口から出ようとするのを、齒を食ひしばつてこらへた。忽ち正道は縛られた繩が解けたやうに垣の内へ駈け込んだ。そして足には粟の穗を踏み散らしつ

つ、女の前に俯伏した。右の手に守本尊を捧げ持つて、俯伏した時に、それを額に押當ててゐた。女は雀でない、大きなものが粟をあらしに來たのを知つた。そしていつもの詞を唱へ罷めて、見えぬ目でじつと前を見た。其の時干した貝が水にほとびるやうに、兩方の目に潤ひが出た。女は目が開いた。

「厨子王」といふ叫が女の口から出た。二人はぴつたり抱き合つた。

（鷗外全集）

大町桂月
名は芳衞。文章家。高知縣の人。大正十四年歿、年五十七。
一榮一落云々
菅原道眞が左遷の途中で詠んだ詩中の句。

一三　四時の變遷

大町桂月

「一榮一落これ春秋。」と云ひけん。暑さ往き寒さ來るは、天の道なり。壯んなる者は老い、盛りなるものは衰ふ。人の身の上も、また陰陽消長の理には洩れず。女子一生の經歷、殊に四時の變遷に似たるを感ずるなり。

大町桂月

春は天地の少女なり。少女は人生の春なり。東風そよ〳〵と吹くまゝに、結びし氷とけて、谷水の潺湲たる聲を發して流るゝは、みどりごの搖籃の中に始めて日の光を仰ぎて、呱々たる聲を放ちて乳を求むるに喩ふべし。燒野の上に萌えそめたる蕨の纖柔なるは、みどりごの手足の纖柔なるに彷彿たり。やがて、咲き出づる花の色は、をとめごのにほへる佛をうつし、枝より枝にとびかひて囀る鶯の聲は、をとめごの謠ふ節にかたどれり。されば、人人白たへの袖ふりはへて、野に山に、春の景色を尋ねて、ひねもす打興ずるが如く、少女の可憐にして、やうやうおよずくるを見ては、世の辛苦にやつれし父母も慰められて、心おのづから長閑なるべし。げに、春は樂しき時候なり、少年は樂しき時代なり。されど、徒らに花鳥にうかされて、田の面をすきかへしつゝ種子を下すことを怠りなば、

春

盛年は重ねて來らず云々
晉の陶淵明の語。

白絲・岐路のなげき
楊子は岐路を見て歎き、墨子は白練絲を見て泣いたといふ故事。

秋の收穫は得られざらん。盛年は重ねて來らず。時に及びて勉強せずして、老いて臍を嚙むとも、また及ぶべしやは。

春去りて夏となりぬれば、木々の花散りはてて、梢には綠の葉のみぞ繁かりける。をとめごの、年長じては、友禪の振袖をぬぎかへて、よそほひ、復、はでなるを旨とせず。

夏

此の際に及びては、父母の膝下にのみはあらず。さまざまの人に交はるにつれて、世の弊風にそみ易きこと、花散りし梢に毛蟲のつき易きが如くなれば、深く愼みて、白絲・岐路のなげきを免るべきなり。かくて年ますく長じて、人の家に嫁すれば、姑につかへ、夫につかへ、小姑に交はり、奴婢を使ふなど、身のつとめいやますにつれて、心の苦しみいやましにますは、なほ夏深くなるにつれ、暑さはげしく蚤・蚊など多くなりて、安らかに眠ることを得ざるが如く、春のたのしきにひきかへて、心苦しきことといふべうもあらず。時には恨をほとゝぎすに寄せて、血を吐く思ひもあるべく、時にはまた、夏瘦と答へて忍ぶ涙もあらん。

秋の初云々
「秋の初になりぬれば、今年も半ばは過ぎにけり、我がよふけゆく月影の、傾く見るこそ悲しけれ。」
（慈鎭和尙）

秋の初になりぬれば、今年も半ば過ぎしなり。我がよふけゆく月影は、いとゞ憐を添ふれども、暑さ消えて、朝夕の風すゞしく、起居いとやすくなりぬるは、女の身のあまたの苦しみをなめて、人の心の賴み難きをさとり、巧に世に處する法を覺えて、また苦しとも思はざるに似たり。やうく西ふく風身にしみて、蟲の聲々あはれなるも、しかすがに、七草の花、春の花にもまして、一種可憐の趣あり。女の身も亦色香やゝ失せぬれど、禮節にならひて、萬づまめやかな

立田川
大和國(奈良縣)生駒川の下流、南流して大和川となる。

秋

る風姿は、少女にもまさりて、尊きを覺ゆるなり。かくて五穀果實など、全く熟したれば、收穫終りて、百姓ども皆太平樂を謠ひ、和氣洋々として鎭守の森に溢るゝは、玉の如き男子、花の如き娘ども、いくたりとなくやすらかに生みて、一家團欒の中に、無量の快樂自ら生ずるが如く、心にかかる浮雲晴れて願望の月いとゞまどかなるべし。

秋老いて、冬の初になれば、小春日和うるはしく、長閑なること春に劣らず。鳥の聲々滑らかにして、立田

冬

川邊に錦流るゝ有樣は、年老いて世累なくなり、數多の子ども皆膝のほとりを圍繞して、反哺の孝を盡くすによりて、老母の心の長閑にして、樂しくなりたるにもたとへつべし。

科戸の風はげしく吹きまさるまゝに、木の葉ちりはてて、滿園皆枯木となりて、いとゞさびしくなりぬるは、齒落ち、目くぼみ、腰は梓の弓と曲り、額の皺は齡の數と共に添ひ、形容枯槁して見る影もなくなれる人の身の上に異ならず。かくて、寒さいよいよつのり、山川草木悉く白雪の中

に埋れて、一年空しくこゝに終る。人の齢もまた愈〻加はり、白髪雪と相映じて、いとゞすさまじく、遂に無常の風にさそはれて、一命、窮陰と共に空しくなりぬべし。觀ずれば、四時自然の理、春あれば秋あり、人間必須の勢、生あればまた死なきを得ず。迷へば南山の齢も短く、悟れば蜉蝣の一期も長し。人生夢と見るも、はた、眞と見るも、一に人の心の如何にあり。天地自然の變遷を解するものにして、始めて共に人生の事を語るべきなり。

（桂月全集、第一卷）

南山の齡　南山は支那の終南山をいふ、長壽を祝する辭。

正岡子規　名は常規。俳人。歌人。松山市の人。明治三十五年歿、年三十六。

高濱虛子　名は清。小說家。俳人。松山市の人。明治七年生。

內藤鳴雪　名は素行。俳人。松山市の人。大正十五年歿、年八十。

一三　時雨

春風に尾をひろげたる孔雀かな　正岡子規

背戸あけて家鴨呼びこむ時雨かな　高濱虛子

遠山に日のあたりたる枯野かな

桐一葉日當りながら落ちにけり

元日や一系の天子富士の山　內藤鳴雪

馬方の馬にものいふ夜寒かな

河東碧梧桐　名は秉五郎。俳人。松山市の人。明治五年生。

荻原井泉水　名は藤吉。俳人。東京市の人。明治十七年生。

沼波瓊音　名は武夫。俳人。名古屋市の人。昭和二年歿、年五十一。

蜻蛉や西日靜かに稲莚　河東碧梧桐

畑打の四五人よりし時雨かな　荻原井泉水

牡丹の花びらをゑがく餘念なや

月にじつと顏照られ月見る　沼波瓊音

西瓜太郎躍り出でよと割つてけり

吹雪やんで月落葉松の上に出づ

山内素行　國文學者。明治大學講師。東京市の人。明治八年生。

宗鑑　山崎氏。連歌師。天文二十二年(一五五三)歿、年八十九。

宗因　本名西山豐一。俳人。肥後國(熊本縣)の人。天和二年(一六八二)歿、年七十八。

知足　下鄉氏。芭蕉の門人。尾張の人。寶永元年(一七〇四)歿、年六十六。

一四　川柳と女性

山内素行

川柳は最も通俗な文學であつて、俳句と形を同じうする滑稽的短詩である。俳句にも滑稽諧謔な作がないではない。

寒くとも火になあたりそ雪佛　宗鑑

風寒し破障子のかみな月　同

鴨の足は流れもあへぬ紅葉かな　宗因

猿ひきは猿の小袖をきぬたかな　芭蕉

とんぼうの顏はおほかた目玉かな　知足

これ等の俳句は、一見しては川柳と何等の差違がないやうな觀がある。しかし、俳句には春夏秋冬の「季」といふことがあるが、川柳にはかういふ制限は更にない。かやうに俳句には「季」といふものを入れることにきめてあるから、その作は自然に多く景物を題目とするが、川柳はおほかた人事を主題とするのである。

寶曆　桃園天皇の御代(一二四二―一二四三)。
寛政　光格天皇の御代(一二四九―一二八〇)。
柄井川柳　名は正通、俗稱八右衞門。江戸の人。寛政二年(一二八〇)歿、年七十三。

川柳は前句附から出た。即ち七七などの句を、前句とし、これに五七五の句を附ける一種の文學的遊戯から起つたものである。七七などの前句は、單に附句を作る題、もしくはその方針を示すに過ぎないものであつたから、終には五七五の附句が獨立するやうになつて、こゝに川柳といふものが生じたのである。川柳といふのは、寶曆より寛政に亙つて前句附の作者の泰斗と仰がれた柄井川柳の號であるが、その評點を川柳點といひ、これが略せられて川柳といふ作句の名となつたのである。この柄井川柳は寶曆七年の頃から「萬句合」といつて、年々前句を定めて募集した投吟の中の勝句を印刷して公にして來たが、明和四年に至つて、更にその中から獨立して意味をなすものを拔萃した小冊子を發行するに至つた。これが即ち謂はゆる

柄井川柳

俳風柳多留である。

川柳の特色は着想の奇拔なのと、描寫の極めて露骨な點にある。各種の階級の人物の弱點を摘發し、嗤笑し、諷刺するのを特色としてゐる。しかし、教訓的な作もあり、優雅な作にも乏しくない。各種の人物の中で飜弄の焦點となつた女性は下女であるが、これは下女の人格などを餘り尊重しなかつた當時にあつては、止むを得ないことであらう。

下女に次いで多く材料にせられたのが嫁である。いふまでもなく嫁とは新婦のことである。

嫁

花嫁は口をつぼみにして笑ひ
花嫁の花に對してつぼみといつたところにおもしろみがある

のである。

みんな顔かくすが嫁のおほ笑
笑ふたび嫁手の甲を口にあて
望まれて嫁一本はめ二本はめ
琴を望まれてやうやう花嫁が恥ぢらひながら琴爪を指にはめるところである。
連れて來た下女ばか嫁はしかるなり
「ばか」は「ばかり」の意である。
親風を柳にうける嫁の孝
孝に身のやつれ花嫁の美しさ
母親の慈愛も亦川柳の材となることが多い。
うたゝねの薄着へ母のあつい恩
物差で畫寢の蠅を逐つてやり
針仕事をしてゐる母親の樣子が見えるやうである。

よく寢れば寢るとてのぞく枕蚊帳
うたゝねもいつか着てゐる母の慈悲
井戸端へ子の行く夢に母は汗
たゝかれず赤子の顏の蚊の憎さ
添乳してつい洗濯が夢になり
寢てゐても團扇の動く親心
我が子をあふぐ團扇がうつゝに動いてゐるのである。
ゆきたけのあはぬを母はうれしがり
我が子の成長を喜ぶ母親の情である。
二三年縫ひこんでおく母の慾
我が子の着物を仕立てる母親の心である。
内　儀
お内儀が立つてはさみの落ちる音

針仕事のはさみである。

呼ばれても二針三針縫つて立ち

いゝ日和内儀戸板をはづさせる

戸板は張物に用ひるためである。

粉のふいた子を抱いて出る夕涼

あせもの粉藥である。

子　供

飯事の所帶くづしがあまえて來

縫紋を乳を呑み〳〵むしるなり

母のゑくぼつゝついて乳を呑み

蟲干に小袖着たがる頑是なさ

買ひにやる子に絹絲を五六寸

買つて來る絹絲の見本である。

乳　母

乳母の名は請狀の時見たばかり

いつも、ばあや〳〵で濟んで行くのである。

さがる乳母晝寢の顏へ暇乞

幼君の晝寢の顏である。

早少女

さをとめは子を寢かすにも田植歌

以上揭げ來つた女性に關する川柳の中には、人を噴飯させるにとゞまる座興的の作もまじつてゐるが、これ等によつて川柳といふ短詩の一斑を知り得ると同時に、古今に通じた女性の面目をも併せて窺ひ得ると信ずる。

西山　京都の西方に連なれる一帶の山地。
東山　京都の東方に連なれる一帶の山地。

一五　萩大名

大名「罷り出でたるは、隱れもない大名。この中御前に詰めてあれば、心が何とやら屈してござる。太郎冠者を喚び出し、何方へぞ、遊山に參らうと存ずる。あるかやい。冠者「御前に。大名「汝を喚び出すは別儀ではない。何方へぞ、遊山に行かうと思ふが、何とあらう。冠者「は、内々は、御意なうても申し上げたう存ずる所に、一段でござりませう。大名「よからうな。冠者「は。大名「何と、西山・東山はいつもの事。様子の違うた所へ行きたいが、何處もとがよからうな。冠者「まことに御意の通り、西山・東山はいつもの事でござる。されば、何處もとがようござりませうぞ。はあ、思ひつけてござる。これよりも下京邊に、心やさがたな御方がござる。殊の外の庭ずきでござる。これへの御遊山がようござりませう。大名「おう、これが一段よかろ。それへ向けて行かうぞ。冠者「は、さりながらこれへござれば、お歌をなされねばなりませぬ。大名「それは如何やうな事を詠むぞ。冠者「三十一文字の言の葉を傳へた事でござる。大名「あゝこりや、なるまいわい。冠者「は、申し上げまする。大名「何とした。冠者「某上京邊を通つてござれば、若い衆の見物にござらうとあつて、萩の花につけて、句づくろひをなされたを、聞いて參りましてござる。御前に教へませう。大名「やい、冠者、其の庭にも、萩の花があらうかな。冠者「殊に亭主好きまするのが、萩でござりまする。大名「ふん、其の儀ならば、急いで教へい。冠者「畏つてござる。七重八重九重とこそ思ひしに、十重咲き出づる萩の花かなと、申す事でござる。大名「ふん、してそればかりか。冠者「はあ。大名「いや、これほどの事ならば詠まうほどに、急いで來い。冠者「畏つてござる。大名「來いく。やい、冠者、して、今の歌のいひ出しは何であつたぞ。冠者「忘れさつしやれてござるか。七重八重でござりまする。大名「おう、それぢや。して其の後は。冠者「申し、殿樣、これ

ではなりますまい。大名「おう、なるまいわい。急いで戻れ。冠者「申し、殿様。大名「何ぢや。冠者「さりながら、ものによそへたら、覺えさつしやれませうか。大名「よそへものによつて、覺えうず。冠者「卽ち扇の骨によそへませう。「七重八重と申す時に、七本八本廣げませう。九重と申す時に九本廣げませう。十重咲きと申す時に、皆廣げませう。大名「おう、これはよいよそへものぢやわい。やい、して又其の後があるぞよ。冠者「はあ、これは猶よそへものがござる。大名「それは何によそへるぞ。冠者「すなはち身共をば、臑脛(すねはぎ)ばかり伸び居つて、厚く折檻なされまする。其の脛をば、思ひ出さつしやれませう。大名「おう、是が一段ぢや。來い〳〵。冠者「とつとござりました。すなはちこれでござりまする。それに待たしやれませ。大名「やい、冠者、亭主に、大名ぢやほどにこれへ迎ひに出よといへ。冠者「畏つてござる。御亭、内にござるか。亭主「えい、冠者殿、何としてござつたぞ。冠者「其の事で

ござる。賴うだ人が、此方の庭を聞き及うで、見物にでござる程に、表へ迎ひに出さつしやれい。亭主「心得ましてござる。はつ、これは又、見苦しい所へ、御腰掛けられうとござりまする。辱うこそござりますれ。大名「やい、冠者、ありや亭主か。冠者「はあ。大名「御亭、不案内におぢやる。かう通りまする。亭主「はつ。大名「やい、太郎冠者、床几々々。冠者「はつ。大名「やい、亭主に、これへ出られいといへ。冠者「はつ。御亭これへ出さつしやれい。亭主「畏つてござる。大名「御亭々々、聞き及うだよりも、いかう庭が見事でおぢやる。亭主「はつ、この中は手入もいたさぬによつて、いかう穢(むさ)うござりまする。大名「いや〳〵、さうもおぢやらぬいの。なう御亭、あの向ふな松は、女(め)松でおぢやるか、男(を)松でおぢやるか。亭主「いや、あれは男松でござりまする。大名「ふん、いかう見事でおぢやる。やい、冠者、見事ななな。冠者「はつ。大名「あの左の方へすつと出た枝を見たか。冠者「なか〳〵、見ましてござる。大名「鋸おく

せい。ひつ切つて心に立てうに。冠者「はゝ。大名「はゝ、御亭、不案内におぢやる。亭主「これ〳〵。冠者「何でかござるぞ。亭主「いや、あの殿様に仰しやれませうには、いづれもの、御腰掛けられては、あの萩の花につけて、短冊を掛けさつしやる。殿様にも遊ばしませいと仰しやれい。冠者「心得ましてござる。申しまする。大名「何とした。冠者「亭主申しまするのには、いづれもが短冊をなされまする程に、花につけて、お歌をば詠まつしやれいと申しまする。大名「ふん、亭主にこれへ出よといへ。冠者「はつ。大名「御亭、只今は歌を詠めと仰しやる。久しう詠まぬが、何とおぢやろ、一つ詠まうか。亭主「遊ばしませう。大名「かうもおりやろか。七重八重九重とこそ思ひしに、とへ咲きいづる萩の花かな。亭主「あゝこれは、いかう出來さつしやれてござりまする。大名「亭主、身は歌よみで居りやるいの。亭主「あゝ、いかう出來さつしやれてござる。大名「やい、冠者、亭主が出來たてて、いかう喜ぶわ。

汝は何方へぞ行け。暇を出すほどに緩りと行て寛いで來い。冠者「畏つてござりまする。亭主「申し殿様。大名「御亭、何でおぢやるぞ。亭主「只今短冊に書きまする。も一度吟じさつしやれませう。大名「おう、心得ておぢやる。七重八重、九重とこそ思ひしに、とへ咲き出づる、出づる。いや、冠者奴は、どこもとに居るぞぢやまでい。亭主「申し殿様御歌に冠者はいりますまい。急いで後を詠まつしやれませい。大名「して、短うおぢやるか。亭主「なか〳〵、字が足りませぬ。大名「したらば、出づるを幾つも書いて置きやれ。亭主「いや、それではなりませぬ。大名「はて、冠者奴がはやう戻り居らいで。亭主「申し殿様、急いで詠まつしやれませい。大名「こゝな奴は、諸侍に手を掛け居つて、憎い奴の。亭主「でも、字が足りませぬ。大名「あゝ、思ひ付けたは。」亭主「何と。大名「ものと。亭主「何と。大名「太郎冠者が向(むかふぢね)に、某が鼻の先。亭主「何でもないこと。とつとといかしませ。

（狂言記）

少女　（山下新太郎筆）

一六　少女の歌

北原白秋

しののめの、われは野ばらよ、
すがすがし、にほひをさなし。
咲けよ、この少女（をとめ）ごころ、
かぎりなきやさしまごころ。

岩のまの、われは泉よ、
すがすがし、いのちつつまし。
祕めよ、この少女ごころ、
しみいづるふかきまごころ。

北原白秋
名は隆吉。詩人。歌人。福岡縣の人。明治十八年生。

しらかばの、われは林よ、
すがすがし、ひびきあたらし、
守れ、この少女ごころ、
世に染まぬきよきまごころ。

夜の空の、われは昴よ、
すがすがし、ひとみうるはし、
燃えよ、この少女ごころ、
みどりなす星のまごころ。

（青年日本の歌）

生田春月
詩人。鳥取縣の人。昭和五年歿、年三十九。

一七　靜かな友達

生田春月

じつと對ひ合つて、何も語ることとてもないので、いつまでもいつまでも默つてゐる。それでゐて、互の心の中は、丁度自分の心と同じやうに、よく解つてゐる。一つの眼つき、一つの微笑でその心持を現すには十分なのだ。

こんな友達があつたなら、どんなに幸福なことであらう。互に信じ合ひ、互に愛し合つて、一點の疑ひもその間に介在しない友達が一人でもあれば、私達は二重に人生を生きることが出來るのだ。たゞ自分ばかりでなく、友達によつても生きることが出來るのだ。

善い友達であることは、善い父であり、善い子であり、善い兄弟であるよりも、一層困難な事であると同じく、一層重要な事でもある。善い父や兄弟である事は、なほ努めずしてもあり得られようが、善い友であることは十人の中七八人までが、生まれながらにしてはあり得られない。大抵の人がそれには品性の錬磨、人格の淨化を必要とするのである。

隣人の愛とか人間愛とかいふ事は、まづ友達の愛から始められなければならない。眞に友達を愛する事が出來れば、愛の世界の鍵は已に握られたのである。

友達を得るのは、主として運である。

どんないゝ友達になれる人が、此の世の何處かに在つても、一生遭逢しないでしまへばそれまでである。またどんないゝ友達になり得た人でも、他の偶然な理由から、互に理解し合ふまでに至らないで別れてしまふ場合もある。甚だしい場合には、最もいゝ友達となり得られた人達が、或外面的な事情のために、例へば黨派的偏見だとか、階級の懸隔だとかのために、最も烈しい敵となつてゐ

去るもの日に疎し
「去ル者ハ日ニ疎シ、來ル者ハ日ニ以テ親シ。」
（文　選）

る事さへ尠くはないと思ふ。

友達運のいゝ人は眞に幸福な人である。財産を惠まれるよりも、名譽を惠まれるよりも、いゝ友達を惠まれた方が、本當の人間らしい人間にとつては感謝すべき幸運なのである。

本當の友達、本當に互に許し合へる心友は、一生の中一人か二人、多くても三四人とはあるまい。その少數の友達でも得られたなら、それは非常な幸福と喜ばねばならない。大抵は知人に過ぎないものだ。

若い時には友達は容易に出來る。けれどもそれがいつまでも續く友達となる事は、極めて稀である。大抵はいつともなく疎遠になり、去るもの日に疎しの例に洩れず、相見ることの少くなると共に、相思ふこともまた少くなるものだ。

けれども、それさへ友情の終りとしてはいゝ方に屬する。もつ

己に如かざるものを友とする勿れ
論語の學而篇と子罕篇とにある語。
聖人
孔子をさす。

シヤンフォール
フランスの文學者（西紀一七五一―一七九四）。

とわるい場合になると、昨日までの友達が、今日は最も激烈な敵となる場合が世の中には非常に多いのである。

「己に如かざるものを友とする勿れ。」とは、聖人の教である。また「彼が何人であるかを知るには、彼の友を見よ。」と、いふ事も云はれてゐる。

友達は何等かの點で相通ずるものがあつて、始めて結びつくことが出來る。どんな點から云つても、共通點もなければ、聊かの理解もないものは、知人ではあり得ても友達ではあり得ないのだ。

私達は「彼の友達である。」といふ事を、誇を以て考へもし、言ひもする事の出來る友達を持たねばならぬ。さうした友達を惠んでくれるやうに運命に祈らねばならぬ。

シヤンフォールは「友達に三通りある。自分を愛してくれる友達、自分を何とも思つてゐない友達、自分を憎んでゐる友達とである。」

リヒテンベルグ
ドイツの哲學者
（西紀一七四二—一七九九）。

と云つた。そしてリヒテンベルグも「まことに然り。」と、それに强く同感してゐる。私達もかうした三通りの友達をその近邊に擧げることが出來るであらう。

自分を憎んでゐる友達とは、早晩別れてしまはねばならない。こんな友達は或時期が來ると、假面を脫して敵として立向ふやうになる。彼はたゞ假面をかぶつた敵にすぎないのだ。

自分を何とも思つてゐない友達は、そんな事もなく、いつまでも微溫的に交際は續くが、それは嚴密な意味からは、勿論友達などと呼ぶべきものではあるまい。

眞の友達は唯自分を信じてくれ、自分を愛してくれる友達である。

併し、それは單に自分を信じ、自分を愛してくれるばかりでなく、また自分が信じ、自分が愛してゐる友達でなくてはならない。

ニイチエ
ドイツの哲學者
（西紀一八四八—一八九九）。

自分が信じ愛することの出來ぬ人は、終に友達ではあり得ないのだ。

人間の一生は友達を失ふ過程のやうなものだ。三十歳といふ年にもなると、若い時分の友達とはだん〳〵疎遠になる。

ニイチエが云つた「別れの時」を、私達は屢〻經過しなければならない。「別れの時」はどんな幸福な人でも、一生のうち絕對に一度も通過しないですますわけには行かない。

その境遇が異なり、その意見が異なり、そのめざす方向が異なると共に、どうしても避けるわけには行かなくなる。私達は餘りに屢〻古い友達と別れなければならない運命の下に置かれる。

然らば、汝の「別れの時」をして意義あらしめよ。

舊い殼を脫することの出來ない蛇は死ぬ。人は時來れば舊衣を脫して、新粧しなければならない。そこで舊い時代と共に、その

時の友達に自然別れなければならなくなる事もあらう。

併し、友達に別れるのは、汝の進歩であらしめよ。汝が餘りに高く登つたために孤獨になるのはいゝ。友達よりも低く下るのであつてはならない。

友達は屢〻苦い裏切と裏切られとに終る。その人を愛してをればをる程、その裏切は私達の胸を刺し貫く。併し一考せよ、私達はいつも裏切られてばかりゐるだらうか。

私達が若し友達に裏切られ、背かれたと感じて、憤を發するやうな事があつたなら、自分は果して彼を裏切らなかつたか、彼に背かなかつたかと、自分に訊ねてみるがよい、自分は果して彼にいゝ友達であつたらうかと。

そして假令彼に對しては、いゝ友達であつたとしても、彼の外の誰かに私達は曾て背いたり裏切つたりしたことはなかつたであらうかと。

私達は他人を責めるばかりでなしに、また自分をも反省してみたいと思ふ。

別れた友を思ふのは、過去の自分を思ふのである。過去を愛惜する心切なれば、別れた友を愛惜するの情なきを得ない。併し、それは別れねばならなかつたのであつた。故なくして別れたのではなかつた。たゞ、その別れが清らかなものでありたい。再び顏を合はせられないやうなものであつてはならない。優しい懷かしさを以て、古い友達を回想できるのは、何たる幸福であらう。

然らば汝は友を失つたのではなかつた。

私は今多くの古い友達について考へる。昔の友達を憶ふのは、恰も自分の青春の墓を見るやうな思ひがする。

私は自分の懷かしい愛する友達を死の手に奪はれた。また歳

月のために空しく隔てられてしまつた。

また第三者の惡意ある讒訴のために、親しい間を裂かれてしまつた事もある。それは止むを得ない事だ。自づと眞實の現れるまで、堪へ忍んで待つ外はない。そしてその友達が再びその親しみに還つて來た日は、新しい友達を得たよりも更に樂しい事である。

かくて今私に殘された友達は、實に長い年月によつてふるひ殘された最も信頼のできる惠まれた友達である。

かうして私は一層古い友達を愛するのである。

「人はその理解しないものを所有しない。」と、ゲーテは云つてゐる。友情は所有し所有せられることである。

理解のないところに、友情は成立する筈がない。

たゞ高貴なる精神のみが友情を解するとは、誰の言葉であつたか。

ゲーテ
ドイツの大詩人
（西紀一七四九―一八三二）。

友情の中に自分の生命の一半を傾倒するものは幸福である。

彼はその友情の中に、第二の自己を經驗するであらう。

靜かな友達と今私が呼ぶものは、寧ろ自然と書物とである。自然と書物との中に、私は離れ難い友を見出してゐる。

併し、その故に私は人間の友達を棄てようとは思はない。それは自然と書物との與へてくれないいかに多くのものを私に與へてくれるであらう。

友は幾度か變る。併し、終に變る事のない友もある。友は古きほどよしといふ。併し、一見舊知の如きよき友もある。私をしてよき友のためのよき友であらしめよ。

（旅ゆく一人）

太平記四十五頁頭註參照。

君 後醍醐天皇。

具行 元弘二年(一九二)歿。

俊基 藤原氏。元弘二年歿。

資朝 藤原氏。元弘二年歿。去る年正中元年(一九八四)。

一八 阿新丸

太平記

一

さるほどに、「此の度の御企てを申し勸めけるは、源中納言具行、右少辨俊基、日野中納言資朝なり。各〻死罪に行はるべし。」と評定一途に定つて、「まづ去る年より佐渡國へ流されておはする資朝卿を斬り奉るべし。」と、その國の守護本間山城入道に下知せらる。

このこと京都へ聞えければ、この資朝の子息國光の中納言、その頃は阿新(くまわか)殿とて歳十三にておはしけるが、父の卿囚人(めしうど)になり給ひしより、仁和寺邊に隱れて居られけるが、父誅せられ給ふべきよしを聞いて、「今は何事にか命を惜しむべき、父と共に斬られて冥途の旅の伴をもし、また最後の御有樣をも見奉るべし。」とて母に御暇をぞ乞はれける。

母御頻りに諫めて、「佐渡とやらんは、人も通はぬ怖しき島とこそ聞ゆれ。日數を經る道なればいかんとしてか下るべき。その上汝にさへ離れては、一日片時も命存(ながら)ふべしとも覺えず。」と、泣き悲しみて止めければ、「よしや伴なひ行く人なくば、如何なる淵瀨にも身を投げて死なん。」と申しける間、母、いたく止めなば、また目の前に憂き別れもありぬべしと思ひ侘びて、力なく、今までたゞ一人附き副ひたる中間を相副へられて、はるばると佐渡國へぞ下しける。

日野資朝(前賢故實所載)

路遠けれども乘るべき馬もなければ、履(は)きも習はぬ草鞋に菅の小笠を傾けて、露分けわくる越路の旅、思ひやるこそあはれなれ。都を出でて十日あまりと申すに、越前の敦賀の津に着きにけり。これ

より商人船に乘つて、ほどなく佐渡國へぞ着きにける。人してかうといふべき便りもなければ、自ら本間が館に至つて中門の前にぞ立ちたりける。折節僧のありけるが立出でて、「この内への御用にて御立ち候か。また如何なる用にて候ぞ。」と問ひければ、阿新殿、「これは日野中納言の一子にて候が、この頃斬られさせ給ふべしと承つて、その最後の様をも見候はんために都より遙々と尋ね下つて候。」といひもあへず涙をはら〳〵と流しければ、この僧心ありける人なりければ、急ぎこのよしを本間に語るに、本間も岩木ならねば、さすがあはれにや思ひけん、やがてこの僧を以て持佛堂へ誘ひ入れて、蹈皮行纏脱がせ、足洗ひて、疎かならぬ體にてぞ置きたりける。

阿新殿これを嬉しと思ふにつけても、同じくは父の卿を疾く見奉らばやといひけれども、今日明日斬らるべき人にこれを見せて

は、なか〳〵よみぢの障ともなりぬべし。また關東の聞えも如何あらんずらんとて、父子の對面を許さず、四五町隔てたるところに置きたれば、父の卿はこれを聞きて、行末も知らぬ都に如何あらんと、思ひやるよりもなほ悲し。子はその方を見やりて、浪路遙かに隔たりし鄙の住居を思ひやつて、心苦しく思ひつる涙は更に數ならずと、袂の乾くひまもなし。これこそ中納言のおはします牢の中よとて見やれば、竹の一むら茂りたるところに、堀掘りめぐらし塀塗つて、行き通ふ人も稀なり。なさけなの本間が心や、父は禁籠せられ、子は未だ幼し。たとひ一所に置きたりとも、何ほどの怖畏かあるべきに、對面をだに許さで、まだおなじ世の中ながら生を隔てたる如くにて、亡からん後の苔の下、思ひ寢に見ん夢ならでは、相見んこともありがたしと、互に悲しむ恩愛の、父子の道こそあはれなれ。

五月二十九日の暮ほどに、資朝卿を牢より出し奉りて、「遙かに御湯も召され候はぬに、御行水候へ。」と申せば、はや斬らるべき時になりけりと思ひ給ひて、「嗚呼、うたてしきことかな、我が最後の樣を見んために、遙々と尋ね下つたる幼きものを一目も見ずして果てぬることよ。」とばかり宣ひて、その後は曾て諸事につきて言葉をも出し給はず、今朝までは氣色しをれて、常には涙を押拭ひ給ひけるが、人間のことに於ては頭燃を拂ふ如くになりぬと覺つて、たゞ綿密の工夫の外は、餘念ありとも見え給はず。夜に入れば輿さし寄せて乘せ奉り、こゝより十町ばかりある河原へ出し奉り、輿舁きするゑたれば、少しも臆したる氣色もなく、敷皮の上に居直つて、辭世の頌を書き給ふ。

五蘊假成形、四大今歸空。
將首當白刃、截斷一陣風。

五蘊 色・受・想・行・識。
四大 地・水・火・風。

年號・月日の下に名字を書きつけて、筆を擱き給へば、斬手後へ廻るとぞ見えし。御首は敷皮の上に落ちて體はなほ座せるが如し。このほど常に法談なんどし給ひける僧來て、葬禮形の如く取營み、空しき骨を拾うて阿新に奉りければ、阿新これを一目見て、取る手もたゆく倒れ伏し、「今生の對面遂に叶はずして、變れる白骨を見ることよ。」と泣き悲しむも理なり。

二

阿新未だ幼稚なれども、健氣なる所存ありければ、父の遺骨をばたゞ一人召使ひける中間に持たせて、「まづ我より先に高野山に參りて奥の院とかやに納めよ。」とて都へ歸し上せ、我が身は勞はることあるよしにて、なほ本間が館にぞ留りける。これ本間が情なく、父を今生にて我に見せざりつる鬱憤を散ぜんと思ふ故なり。かくて四五日經けるほどに、阿新書は病のよしにてひねもすに臥

し、夜は忍びやかに拔け出でて、本間が寢處なんど細々に窺うて、隙あらばかの入道父子が間に一人刺し殺して、腹切らんずるものをと思ひ定めてぞ狙ひける。

或夜雨風烈しく吹きて、宿直する郎等どもも皆遠侍に臥したりければ、今こそ待つところの幸よと思ひて、本間が寢處の方を忍びて窺ふに、本間が運や强かりけん、今夜は常の寢處を變へて、いづくにありとも見えず。また二間なる處に燈の影の見えけるを、これは若し本間入道が子息にてやあるらん。それなりとも討つて恨を散ぜんと、拔け入つてこれを見るに、それさへ爰にはなくして、中納言殿を斬り奉りし本間三郎といふものぞたゞ一人臥したりける。よしやこれも時にとつては親の敵なり、山城入道に劣るまじと思ひて、走り掛からんとするに、我は元來太刀も刀も持たず、たゞ人の太刀を我が物と憑みたるに、燈殊に明らかなれば、立寄らばやがて驚き合ふこともやあらんずらんと危みて、左右なく寄り得ず。如何せんと案じ煩うて立ちたるに、折節夏なれば、燈の影を見て、蛾といふ蟲の數多明障子に取付きたるを、すはや究竟のことこそあれと思ひて障子を少し引きあけたれば、この蟲數多内へ入つて、やがて燈を打消しぬ。今はかうと嬉しくて、本間三郎が枕に立寄つて探るに、太刀も刀も枕にあつて、主はいたく寢入りたり。まづ刀を取つて腰にさし、太刀を拔いて胸元に當て、寢たるものを殺すは死人を殺すに同じければ、驚かさんと思ひて、まづ足にて枕をはたとぞ蹴たりける。蹴られて驚くところを、一の太刀に臍の上を疊までつと突き通し、返す太刀に喉笛さし切つて、心靜かに後の竹原の中にぞ隱れける。

本間三郎が一の太刀に胸を通されてあつといふ聲に、番衆ども驚きさわぎて、火を燃してこれを見るに、血のつきたる小さき足跡

あり。「さては阿新殿の仕業なり。堀の水深ければ、木戸より外へはよも出でじ、捜し出して打殺せ。」とて、手に〳〵松明をともし、木の下、草の陰まで、殘るところなくぞ捜しける。

阿新丸（前賢故實所載）

阿新は竹原の中に隠れながら、今はいづくへか遁るべき、人手に掛からんよりは、自害をせばやと思はれけるが、憎しと思ふ親の敵をば討ちつ。今は如何にもして命を全うして、君の御用にも立ち、父の素意をも達したらんこそ、忠臣・孝子の義にてもあらんずれ、若しやと、一まづ落ちて見ばやと思ひ返して、堀を飛び越えんとしけるが、口二丈深さ一丈に餘りたる堀なれば、越ゆべきやうもなかりけり。さらばこれを橋にして渡らんよと思ひて、

堀の上に末靡きたる吳竹の梢へさら〳〵と登りたれば、竹の末堀の向ひへ靡き伏して、やす〳〵と堀をば越えてけり。夜は未だ深し、湊の方へ行きて、船に乘つてこそ陸へは着かめと思ひて、辿る辿る浦の方へ行くほどに、夜もはや次第に明け離れて、忍ぶべき道もなければ、身を隠さんとて日を暮し、麻や蓬の生ひ茂りたる中に隠れゐたれば、追手どもとおぼしきものども百四五十騎馳せ散つて、「若し十二三ばかりなる兒や通りつる。」と、道に行き逢ふ人毎に問ふ音してぞ過ぎ行きける。

阿新その日は麻の中にて日を暮し、夜になれば湊へと志して、そこども知らず行くほどに、孝行の志を感じて、佛神擁護の眸をやめぐらされけん、年老いたる山伏一人行き逢ひたり。この兒の有樣を見て痛ましくや思ひけん、「これはいづくよりいづくをさして御渡り候ぞ。」と問ひければ、阿新事のさまをありのまゝにぞ語りけ

薄伽梵
佛の敬稱。世尊。

る。山伏これを聞いて、我この人を助けずば、只今の程にかはゆき目を見るべしと思ひければ、「御心安く思し召され候へ。湊に商人船ども多く候へば、乘せ奉りて越後・越中の方まで送りつけ進らすべし。」といひて、足たゆめばこの兒を肩に乘せ背に負うて、程なく湊にぞ行き着きける。

夜明けて、便船やあると尋ねけるに、折節湊のうちには船一艘もなかりけり。如何せんと求むるところに、遙かの沖に乘り浮かべたる大船、順風になりぬと悅びて檣を立て篷を捲く。山伏手を擧げて、「その船これへ寄せてたび給へ、便船申さん。」と呼ばはりけれども、曾て耳にも聞き入れず、船人聲をほに上げて、湊の外へ漕ぎ出す。山伏大いに腹を立て、柿の衣の露を結びて肩にかけ、沖行く船に立向つて、いらたか數珠をさら〳〵と押揉みて、「一持祕密呪、生々而加護、奉仕修行者、猶如薄伽梵。」といへり。況や多年の勤行に於

てをや。明王の本誓誤らずば、權現・金剛童子・天龍夜叉・八大龍王、その船此方へ漕ぎ戻してたばせ給へ。」と、跳り上り〳〵肝膽を碎きてぞ祈りける。行者の祈神に通じて、明王擁護やし給ひけん、沖の方より俄に惡風吹き來つて、この船忽ちに覆らんとしける間、船人どもあわてて、「山伏の御坊、まづ我等を御助け候へ。」と手を合はせ膝を屈め、手に〳〵船を漕ぎ戻す。汀近くなりければ、船頭船より飛び下りて、兒を肩に乘せ、山伏の手を引いて、屋形の内に入りたれば、風は元の如くに直りて、船は湊を出でにける。

その後、追手ども百四五十騎馳せ來り、遠淺に馬を控へて、「あの船とまれ。」と招けども、船人これを見ぬよしにして、順風に帆を揚げたれば、船はその日の暮ほどに、越後の府にぞ着きにける。阿新山伏に助けられて鰐の口の死を遁れしも、明王加護の御誓いちじるかりけるしるしなり。

本間久雄
文學博士。英文學者。評論家。早稲田大學教授。米澤市の人。明治十九年生。

アゼンス
ギリシヤの首府アテネのこと。二千年前歐洲文化の先驅として繁榮を極めた所。

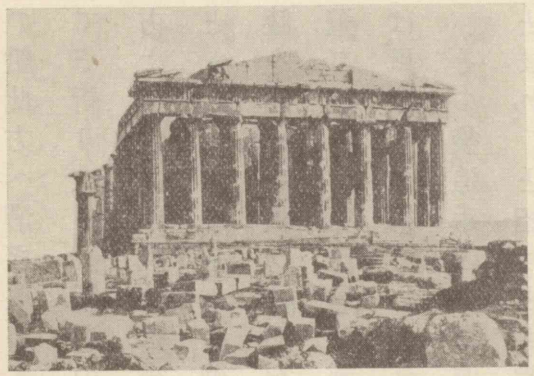
パルセノン宮殿
西暦紀元前五世紀の半ば頃の建築。

一九　自然と藝術

本間久雄

七八年前のことであるが、私は歐洲の旅をして、ギリシヤのアゼンスに一週間ばかり滯在したことがあつた。

ギリシヤの藝術は、彫刻でも建築でも、古來端正明朗を以て稱せられてゐる。例へば建築だけについて見ても、ギリシヤの建築は、アゼンス郊外の例のアクロポリスの丘の上に建てられたパルセノン宮殿――今日では、あちらこちらくづれて、半ば廢墟のいたましい姿であるが――がよく證明してゐるやうに、室内の間取りから外廊まで、どこ



パルセノン宮殿

ゴシック
西洋建築の樣式の一。その特長は、アーチの上端高塔の頂、皆鋭く尖つて、天を衝く趣きがある。

から見ても、明るく朗らかで、陰影は一つもない。これをヨーロッパ北方の、例のうす暗い陰鬱なゴシック大伽藍などに較べると、全く味はひが違つてゐる。そしてこの違ひの重なる原因は、ギリシヤの自然及びその風土・氣候と、北歐のそれとの異なるところから來てゐる。

即ち、北歐の方は、自然が餘りに峻嚴で、親しみにくく、その上風土・氣候が人間に幸しないために、それを防ぎ、或は征服するために――つまりそれらを敵として戰ふために造られたのがゴシックの建築であるが、ギリシヤの建築の明朗さは、ギリシヤの自然の明朗さから來てゐる。言葉を換へて云ふと、ギリシヤ古民族が天然に惠まれて、自然を友とし、自然そのものに好意を感じてゐたところからのおのづからの產物である。

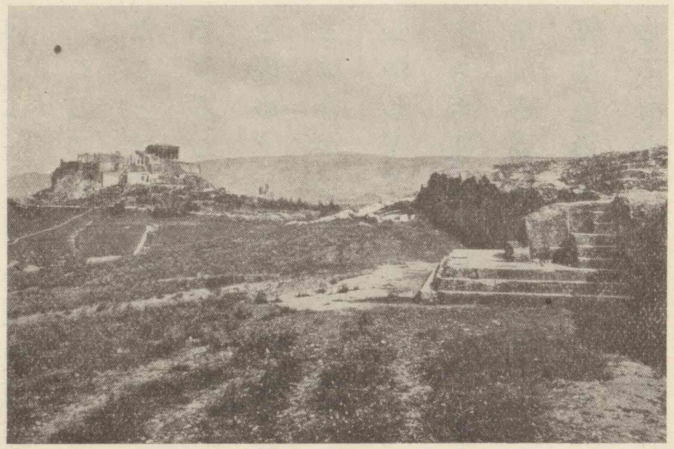
このことは、無論文學に就いても言ひ得ることで、例へば北歐の

神話は、悲哀・勞働・戰爭など、すべて人類生活の苦しい暗い方面を描いてゐるのに對して、ギリシヤ神話は、喜悅・戀愛・友情など、すべてその樂しく明るい方面を描いてゐるなど、それを證明してゐる一つの例である。そして重ねて云ふが、これは大部分、自然や風土・氣候の關係なのである。

このことは、理窟ではわかつてゐる。しかしギリシヤに旅をした折ほど、私は感情の上で、味はひの上で、はつきりとこのことを會得したことはなかつた。

アゼンス滯在中、私は毎日のやうにアクロポリスの丘に上つて、四方を眺めるのを樂しみにした。このアクロポリスは、アゼンス市の西南端にある海拔五百餘尺の丘で、天の利と地の利とを占めた非常に風景の明媚なところである。丘の上からのぞむと、遙かに東北には大理石の產地として有名なペンテリコン山、東南にはヒ

ユメトス山、西にはエガレオス山が聳え、西南には、僅かではあるが平地が展けて、その盡きるところがペリウスの港である。そこからすぐ有名なサラミスの海――紀元前四八〇年、七百五十艘から成るペルシヤの大艦隊を、僅かに三百艘のギリシヤの艦隊が物の見事に擊破して、ギリシヤ隆盛の基を開いたので歷史上有名な所である――につゞいてゐる。この海は、すぐ西南手の居くあたりにサラミス島を控へて灣のやうになつて居り、眺も小さく、浪も靜かで、大昔そんな血みどろな大海戰があつたなどとは想像



アクロポリスの丘（左手）

されない海である。が、とにかくアクロポリスは三方に高く山を仰ぎ、一方に海を望む、誠に山と海の眺を兼ねた高臺である。

このアクロポリスの丘から四方を眺めて、私の先づ第一に感じたことは、空が紺碧ともいふべき濃い色で、而もそれが非常に澄んでゐることと、空氣の透明なことであつた。私はヨーロッパの各地を經めぐつて、これほど碧く美しい空と、澄んだ空氣とに接したことはなかつた。この點ではイタリヤも特筆さるべき國であるが、しかしギリシヤには遙かに及ばない。次に感じたことは、このアクロポリスで見る太陽の光の、際立つて美しいといふことであつた。時刻の移るにつれて、太陽は山に海に映照して、さまざまな複雜な色彩情景を現出する。先づ太陽が海に映り、それが山に反映して、海と山とが或時はサフラン色に、或時は鬱金色に、或時は菫の花のやうな紫色に變り、山と水と天と地とが、名匠の描いた一幅の

繪のやうな趣きを呈するのである。つまりギリシヤの自然は明澄又は明朗の一語に盡きる。

再び繰りかへすが、私はこのアクロポリスの丘に上つて、始めてギリシヤ藝術の明朗さのその依つて來るところが――單に理窟でなく、本當によく呑み込めたやうな氣持がした。

（我が鑑賞の世界）

二〇　早　春

今井邦子

今井邦子
歌人。德島市の人。
明治二十三年生。

一

元旦に例年初詣をする明治神宮の風景には、見れども飽かぬ思ひがある。あの一の鳥居をくゞつてからしばらくは、正面に空を仰ぎ見つゝ進んでゆくが、二の鳥居の處で方向が變つて、左手の老

杉鬱たる森の上から神宮の方へかけて蒼々と空のひらく思ひのする、あの道すぢは實に快い。そして今一まがりして神の宮處に向つて直線に進みゆくと、拜殿の前は何萬の人が渦をなしてゐるのだけれど、廣前の樹々の眺は誠に靜かで、幾本かの松が枝は趣き深く枝をのばし、神聖にあくまですが〳〵しい眺をなしてゐる。

昨年は私は、參拜を終るといつもの歸りの途をとらないで、左手の廣い芝生のなかを横ぎつて、池のある方へまはつてみた。深い樹立の下にはきびしい霜柱が立つてゐるが、その土の上には青々と日かげかづらがさやかに亂れのびてゐる。その日かげかづらの一つを手にとつてみると、霜は結んでゐないがひやりと冷たい。霜土の上にこんなに冷たくなつて、いよ〳〵青い色が生き、春に向つて伸びつゞいてゆくこの命づよいはひ草を、私は遠い神代の人の心になつて、しばらく手にからげて眺め愛でたことであつた。

池水には氷ははつてゐなかつた。しかし見る目に寒いやうに澄みかへつてゐる。そこの土手に立つて眺めると、はるか向ふに何の木が裸木が枝さきを切りそろへた程に、一せいに束になびくやうにして、繁々と立ちそろつて見える。その枝は晴れ渡つた日光を受けて、キラ〳〵と輝くやうに見えてゐた。その木の原はどこまで續くのか、先の方は枝、枝、枝、とたゞ遠く霞みゆく眺であつた。それは春といふにはまだ早く、繪にかく時にも一點の色彩もはつきりとは入れられない、たゞほのかに、代赭のなかへうすく青味を入れてでも、あるかないかの色だつた感じを表すくらゐなもので、きはめて淡々とした風景ではあるが、それでゐてどこかかすかに春うごく心を含んでゐる眺であつた。

私自身は昔から、春の花時の眺よりも、かうしたまだ春來る前の、ほんのほのかな暖味をきざしはじめる頃の野山の眺が好きなの

である。それで私はしばらくそこに立つて、やがて來るべき春待つ思ひに、心樂しく思ひふけつたのであつた。

裸木の枝うちかすむ野の末やきびしき冬も
やゝすぎにけり

烏山
東京府北多摩郡三鷹村。

甲州街道
東京市四谷區内藤新宿から山梨縣府中に至る國道。

二

それから幾日かの後、私は烏山附近の友の家を訪れることがあつた。足のわるい私は、甲州街道を車に乘つて走らせてゐた。この街道は今でも兩側に茅葺の家が立ちならび、その屋根に草や苔が青々と生じてゐるのである。この日は朝時雨があつて、おだやかに晴れた日であつた。苔の屋根からは思ひ出すやうに時をおいて、ポツリ〳〵露の玉が光つて落ちてゐた。

このあたりに多い竹藪の冬ざれの葉は、今朝の時雨にその葉が

しめるやうに、さやかに枝をゆるがせてゐた。

S牛乳店の牧場の立札のある處を左へ曲つてはひつてゆくと、秋の日に私の目を驚かした大きな百日紅の木のある百姓家の前を通る時、私はその太く大きい幹がツル〳〵に乾いて、冬木の姿でわびしく立つてゐるのを一瞬目に見て過ぎたのである。

踏切を越えた向ふは、廣々とした武藏野の田野で、ところ〴〵に小さい森が見えてゐる。その森のあたりは遠く靄だつて、枝ばかりの冬木ながら、何かこんもりとおもしろい姿を浮き上らせてゐる……。その木の姿は、元旦に明治神宮の池のほとりから遠く望んだ、裸木の日にキラ〳〵と光り靡いて見えた眺からみると、言ふに言はれぬ處にものの和らぎがある。春の光に近づきつゝある……と言つても、芽吹きの時にはなほ遠いが、寒明け近い晴々しい眺であつた。まことにこの頃の季のうつりの微妙さは、霞のやう

にほのかに渡つてくる思ひがある。

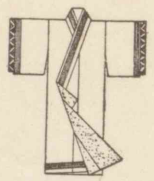
私の車はやがて小さい楢林の道に入つた。そこの土は時雨の後のしめりをもつてにほひたち、日はぬく〳〵とさし透つてゐた。楢の林のどこかで、何か可愛い小鳥の聲がしてゐるのを耳にとめて、もう春の近いことを思はざるを得ないのであつた。

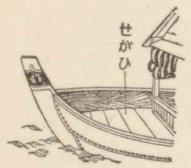
寒時雨あがる野づらは靄だちて裸木の枝に
鳥啼きなごむ

（秋鳥集）

平家物語
十二卷。作者未詳。平家一門の興亡を敍した軍記物語。

判官
源九郎判官義經。


五つぎぬ



舟のせがひ

二一 扇の的

平家物語

さるほどに、阿波・讃岐に平家を叛いて源氏を待ちけるつはものども、あそこの嶺、こゝの洞より、十四五騎、二十騎うち連れ〳〵馳せくるほどに判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。「けふは日暮れぬ、勝負を決すべからず。」とて、源平互に引退くところに、沖より尋常に飾つたる小舟一艘、汀へ向つて漕ぎ寄せ、渚より七八段許りになりしかば、舟を横ざまになす。あれはいかにと見るところに、舟の中より年のよはひ十八九許りなる女房の、柳の五つぎぬに紅の袴着たるが、皆紅の扇の日出したるを、舟のせがひに挾み立て、陸（くが）に向つてぞ招きける。

判官、後藤兵衛實基を召して、「あれはいかに。」と宣へば、「射よとにこそ候ふらめ。但し大將軍の矢おもてに進んで、けいせいを御覽

ぜられんところを、てだれに狙うて射落せとの謀とこそ存じ候へ。さりながら、扇をば射させらるべうもや候ふらん。」と申しければ、判官「身方に射つべき仁は誰かある。」と問ひ給へば、「てだれども多う候ふなかに、下野の國の住人那須の太郎資高が子に、與市宗高こそ小兵には候へども、手はきいて候。」と申す。判官「證據があるか。」「さん候。かけ鳥などをあらそうて、三つに二つは必ず射落し候。」と申しければ、判官「さらば與市呼べ。」とて召されけり。

與市その頃は、未だ二十許りの男なり。褐に赤地の錦をもつて、おほくび、はたそでいろへたる直垂に、萌黄縅の鎧着て、あしじろの太刀を佩き、二十四さいたるきりふの矢負ひ、うすきりふに鷹の羽わり合はせて、はいだりけるぬための鏑をぞさし添へたる。重籐の弓脇に挾み、冑をば脱いで高紐にかけ、判官の御前に畏る。判官「いかに與市。あの扇の眞中射て、かたきに見物せさせよかし。」と宣へば、與市「仕るとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、永き身方の御弓矢のきずにて候ふべし。一定仕らむずる仁に、仰せつけらるべうもや候ふらん。」と申しければ、判官大きに怒つて、「今度鎌倉を立つて西國へ向はんずるものどもは、皆義經が下知を背くべからず。それに少しも仔細を存ぜん人々は、これより疾う疾う鎌倉へ歸らるべし。」とぞ宣ひける。與市重ねて辭せば惡しかりなんとや思ひけん、「さ候はば外れんをば存じ候はず。御諚で候へば、仕つてこそ見候はめ。」とて、御前を罷り立ち、黑き馬の太う逞しきに、まろほやすつたる金覆輪の鞍おいて乘つたりけるが、弓取りなほし、手綱かいくつて、汀へ向いてぞ歩ませける。

身方の兵ども、與市が後を遙かに見送つて、「この若者一定仕らうずると覺え候。」と申しければ、判官もたのもしげにぞ見給ひける。矢ごろ少し遠かりければ、海のなか一段許りうち入つたりけれど

二月十八日
壽永三年二月十八日。

も、猶扇のあはひは七段許りもあるらんとこそ見えたりけれ。頃は二月十八日酉の刻許りのことなるに、をりふし北風激しう吹きければ、磯うつ浪も高かりけり。舟はゆりあげゆりすゑて漂へば、扇も串に定らずひらめいたり。沖には平家船を一面に並べて見物す。陸には源氏くつばみを並べてこれを見る。何れも何れも、晴ならずといふことなし。與市目をふさいで、南無八幡大菩薩、別しては我が國の神明・日光の權現・宇都の宮・那須のゆぜん大明神、願はくはあの扇

那須與市（史畫百種）

の眞中射させてたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓きり折り自害して、人に再びおもてを向ふべからず。今一度本國に歸さんと思し召さば、この矢外させ給ふな。」と、心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹き弱つて、扇も射よげにこそなつたりけれ。與市鏑を取つて番ひ、よつぴいてひやうと放つ。小兵といふでう、十二束三ぶせ、弓は強し、鏑はうら響くほどに長鳴りして、あやまたず扇の要際一寸許りおいて、ひいふつとぞ射切つたる。鏑は海へ入りければ、扇は空へぞ上りける。春風に一もみ二もみ揉まれて、海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の夕日に輝くに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬゆられけるを、沖には平家舷（ふなばた）を叩いて感じたり。陸には源氏箙を叩いてどよめきけり。

徳冨蘇峰
名は猪一郎。思想評論家。貴族院議員。熊本縣の人。文久三年(一八六三)生。

和宮
親子内親王。孝明天皇の御妹君。徳川家茂に降嫁し給ふ。明治十年薨、御年三十二。

近衛家
近衛忠熙。

村岡
勤王家。西郷隆盛等と結んで王事につとめた。明治六年歿、年八十八。

梁川星巖
名は孟緯。江戸後期の詩人で勤王家。美濃國(岐阜縣)の人。安政五年(一八五八)歿、年七十。

紅蘭
女流の畫家で詩人。明治十二年歿、年七十六。

蓮月尼
本姓名は太田垣誠。尼僧。歌人。明治八年歿、年八十五。

文化三年
光格天皇の御代。

如水
名は孝高。もと秀吉の謀臣。のち中津藩主。慶長九年(一六〇四)歿、年五十九。

長政
福岡藩主。征韓の役に大功があつた。元和九年(一六二三)歿、年五十六。

二三　野村望東尼

徳冨蘇峰

維新改革の大業は、男子の働に成りたることは言ふまでもありませんが、しかし決して男子のみの事業ではありません。その隱れたる半面には、婦人の力が少からず加はつてをります。皇族方としては、和宮の如き御方もあります。また一般の有志家の、母であり、妻であり、姉妹であり、娘である人々の、各〻の内に於ける働は、何等記錄の上には掲げてありませんけれども、我等は決して見のがすことができないのであります。

その中で歴史にその名が現れた婦人もあります。例へば近衛家の老女村岡、梁川星巖先生の夫人紅蘭女史の如き、或は蓮月尼の如き、その類は少くありません。その中でも、野村望東尼の如きは、傑出の女性と謂はねばなりません。

望東尼は、維新の大業に功勞があつたといふわけで、明治天皇から正五位を贈られました。また昭憲皇太后から、その墓を改修すべく金一封を賜はりました。また彼女の自筆の詠歌「向陵集」は、昭憲皇太后の御覽に供したところ、深く御感賞遊ばされたといふことであります。彼女は女性として、誠にめづらしき花を死後に咲かせました。

野村望東尼

望東尼は、文化三年九月六日、筑前福岡の城下に生まれました。父は浦野重右衛門、母はみち子と云ひ、望東はその三女でありました。浦野家は黑田家の士として、立派なる家柄でありました。その祖先若狹守といふのは、淺井長政の使番二十騎の一人であつて、後に黑田家の先祖如水、及びその子長政に仕へ

て、到るところで勳功を樹てました。彼女は、實に理想的とも言ふべき日本武士の家に生まれ、その家に成長し、その最も善美なる教育を受けました。

しかるに彼女の姉は早く緣づき、兄弟姉妹は共に家にあり、彼女は、ほとんどその一身に家庭の務めを背負つて、いそしんだのでありました。彼女の結婚が當時の慣例に比して、比較的後れてゐたのは、彼女が父母のために、獻身的に家庭の勞苦に服したからでした。

その中にも彼女は、凡そ裁縫・刺繡・機織の如き、何れも勝れた技を持ち、また割烹・料理の如きは、最も得意としたところで、本職の者さへ驚いたといふことであります。殊に押繪に至つては、自ら野村流といふ一流を創めたほどであつて、實に驚くべき巧妙なるものでありました。

大隈言道
歌人。福岡の人。明治元年歿、年七十一。

かくて彼女は二十四歳の春に、野村新三郎なる者の後妻として嫁しました。野村家もまた筑前藩士の中で、立派な家柄でありました。その先祖佐々木肥後守は、江州野村に於て、一萬六千石を領した大名でありました。それから黑田家の三代忠之に仕へ、新三郎の時に至つて四百十三石を領してゐました。當時に於て四百石の士と言へば、先づ上士に加ふべきものでありませう。

彼女は、家庭に於ける、あらゆる雜務に追はれつゝも、豫て嗜みの和歌・繪畫・書道・挿花・點茶・刺繡・押繪等、何れもその蘊奥を極め、殊に和歌と書とは最も傑出し、和歌の如きは、これを平安朝の諸〻の才媛の歌に比べても、多く劣らないといふほどに達しました。彼女は二十七歳にして、その夫新三郎と共に、大隈言道の門に入り、和歌を學びました。

大隈言道は、德川末期に於ける最も毛色のかはつた歌人の一人

弘化二年
仁孝天皇の御代。

で、今日でも専門家は、彼について讃美の言葉を惜しまぬほどの、大なる歌人ですが、彼女がその門に入りて、如何ばかり指導を受け、感化を受けたか、それは今更想像にも餘りあるほどであります。

而してその師言道もまた、彼女に如何に許してゐたかは、文久三年、彼女の歌集「向陵集」に序して、「若かりしより、その歌どもを、今の老に至るまで見つるに、なべての人の心およばぬあはれをいひ出で、女のわざとは見え難し。」と言ひ、また「おのれ教子あまたなれど、また類あることなし。」と申してをりますから、この上推稱の言葉を添へる必要はありますまい。

弘化二年十月、夫新三郎は、家を長子に讓り、望東と共に福岡城南平尾村の山莊に隱居しました。この山莊は、後に樹木茂れる平尾の山を負ひ、前には展開せる田圃の彼方、遙かに若杉・竈の諸山を望み、隱居所として、申し分なきところであつて、そこには山から來た

龍田
奈良縣生駒郡。
栂尾
京都市右京區。

安政六年
孝明天皇の御代。

文久元年
同上(一八六一)。

清水を湛へて池とし、庭には吉野の櫻や、龍田・栂尾(とがのを)の楓などを移し植ゑ、如何にも幽居の趣があり、彼女の歌に、

音もなき筧の水のしたゝりも
たりあまりたる谷の一つ家

とある通りでありました。かくてこのまゝ果ててしまつたならば、彼女はたゞ立派なる教養ある武士階級の、模範的婦人たるに止つたでせうが、事はこれから發展して來ました。

元來彼女の夫新三郎は、たゞ文藻ある風流な詩人であるばかりでなく、本來の勤王家でありました。然るに彼は、安政六年七月二十七日、六十六歳で逝きました。これから、寡婦である彼女は如何に活動したでありませう。

ともかくも、豫て上京の志がありましたので、彼女は文久元年十一月二十四日に先づ上方へ旅立ちました。その時の事は、彼女の

上京日記なるものがあつて、詳しく書いてあります。彼女の目的は、一つには、皇居を拜し、一つには、その師大隈言道に見えんとするにありました。當時の旅行は、今日の旅行と同一に考へられません。まして婦人の一人旅は、尙更難儀であります。彼女は兵庫の湊川なる楠公の墓に詣でて、

かしこしとぬかづくうちも我が袖
みなと川水せきぞかねける

と詠じました。

彼女は、大阪に於て、その舊師大隈言道に會ひ、如何にその心を動かしたかは、その日記に、「急ぎ大隈言道大人の許に行く。嬉しさふばかりなし。たゞかたみに涙さへこぼる。」とあるを見ても知られます。

また皇居を拜して、如何に感激したかは、

馬場文英　勤王家。福岡藩の用達大文字屋德二郎。

大覺寺　今の京都市右京區嵯峨町。

しろたへのみのしろ衣みるばかり
今日九重に降れる初雪

と詠んでゐるのを見てもわかります。

彼女はこの旅行の收穫として、一人の友人を得ました。それは馬場文英（ぶんえい）であります。文英は、上方に於ける彼女の友人として、爾來書信の往復をいたしました。上國の形勢は悉く文英の通信で解りました。彼女は文英の盡力で、近衞公に拜謁しようとしましたが、公は幕府の忌諱に觸れて、蟄居謹愼の際であつたので、それは行はれませんでした。

且また近衞家の老女村岡も、嵯峨野の大覺寺に蟄居してゐたので、それを訪ねましたが、村岡は左の歌を詠じて、面會を斷りました。

はるゝ〳〵とたづねし君が惠をも
しづ心なくあはで苦しき

平野次郎
勤王家。筑前國(福岡縣)の人。元治元年(一八六四)生野で義兵をあげて敗れ、遂に斬られた。年四十三、

これは面會したならば、その主君たる近衞家を煩はすだらうことを憚つた爲でありませう。彼女はこれに答へて、

雲ゐにも君が名高く聞えけり
　慕ひ來る身をあはれとも見よ

といふ歌をおくりました。

かくて彼女は上方に滯在してをりましたが、故郷の家族や友達は、心配の餘り、これを國に迎へました。この旅行は彼女に一轉機を與へ、これからして彼女の平尾山莊はあたかも志士の集會所ともいふべきものになりました。

當時筑前藩は、佐幕・勤王の二派あり、勤王派の首領にして、家老なる加藤司書を初め中村圓太・平野次郎、その他の者ども、何れもこの山莊に往復しました。殊に平野次郎國臣は、和歌の嗜みがあつたので、屢〻彼女と和歌のやりとりをいたしました。彼が、愈〻死を決し

生野
今の兵庫縣朝來郡生野町。

高杉晉作
名は春風。吉田松陰の門人。勤王家。萩藩士。慶應三年(一八六七)歿、年二十九。

元治元年
孝明天皇の御代。

て、生野で旗擧する時に、三田尻から彼女に左の歌を贈りました。

大君にさゝげあまりし我が命
　いまこそ捨つるときは來にけれ

言ひやらん言の葉草はしげけれど
　筆にはえこそつくさざりけれ

然るに筑前に於ては、勤王派の勢力、殆ど佐幕派のために一掃されんとし、かくて彼女の敎子である中村圓太なども獄に投ぜられ、その間に於ける彼女の心配は、容易ではありませんでした。

また吉田松陰の第一門人ともいふべき長州の高杉晉作の如きも、中村圓太の周旋で、一時その山莊に潛伏したことがありました。それは元治元年十一月頃でありました。その時分西鄕隆盛も福岡に來てゐましたが、福岡の有志家どもが、これを平尾山莊に招き、高杉と會見せしめようとしましたが、强情なる高杉は、これを拒む

色がありました。そこで傍に居つた望東は筆をとつて、左の歌を書いて示しました。

くれなゐの大和心はいろ〳〵の
絲まじへねば綾は織られず
ものゝふの大和心をよりあはせ
する一すぢの大縄とせよ

そこで高杉も悟るところあり、遂に西郷と會見いたしました。しかし西郷と高杉が山莊で會見した事については、隨分異論もあつて、何とも斷言できませんが、この歌だけは間違ないと信じます。如何に彼女が、薩長の偉大なる志士を調和したかは、言外に想像ができませう。

何れにしても、勤王黨の有志が、各〻私見を捨てて大義に合はせねば目的を達し得られぬといふのが、彼女の考であつたと思ひます。

姫島　福岡縣絲島郡芥屋村海上の島。

般若波羅密多心經　大般若經の要點をあつめたもの。

高杉が愈〻國に歸つて、義兵を擧げ、俗論を打破らんとする決心を定めるや、望東は旅衣一具を調へ、これを餞別として、左の歌を添へました。

まごころをつくしのきぬは國のため
たちかへるべきころもでにせよ

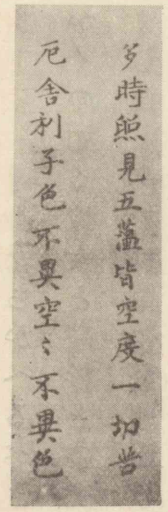
かくの如く彼女と高杉との交はりは、これから追ひ〳〵深くなりました。高杉は單に長州出の有志家たるのみならず、日本に於ける有數の人傑でありました。彼は二十九歳で逝きましたが、しかも彼の仕事は、實に大なるものでありました。

さて彼女も遂に反對黨のために玄界灘の一孤島、姫島に流されることになりました。彼女がこの島に於ける生活は、姫島日記によく語られてあります。彼女はこの孤島に流されたる際、指頭を刺して血を搾り、般若波羅密多心經を血書して、刑に處せられた遺

族に送りました。そしてその心經の奥に、

おくれゐてかくもかひなし法の文
よみがへりこむつてならなくに

と書きつけました。



血書の心經

今もこの血書が殘つてをりますが、實に立派なものであります。しかるに彼女の友人高杉は、遂に謀を以て、彼女を島から奪ひ出しました。そして彼女を馬關に迎へて、これを優遇しました。高杉は慶應二年の末から、追ひ〳〵病氣が甚だしくなりました。そして彼女は常にその看護を怠りませんでした。病中の高杉は、或時筆を執つて、

小田村素太郎
楫取素彦の舊名。勤王家。山口藩士。大正元年歿、年八十四。

宮市
三田尻の北隣、山口縣佐波村。

おもしろきこともなき世におもしろく

と書いて、彼女に示しました。彼女は直ちに筆を執つて、

すみなすものは心なりけり

との句を書きつけました。然るに高杉の病は、益〻重くなり、三年四月十四日二十九歳で馬關に長逝したのでありました。

それからやがて、彼女は山口に引取られ、小田村素太郎の家に寓しました。小田村は吉田松陰先生の友人で、且先生の妹壻でありまして、他日の楫取男爵であります。

かくて、薩長の聯合が出來、愈〻勤王討幕の聯合軍は、上方指して上ることになりました。彼女はその出陣を見送るために、三田尻へ赴き、その翌日から一週間、宮市（みやいち）の天滿宮に參籠し、斷食をして勤王軍の幸運を祈願いたしました。それが病の因となり、十一月六日三田尻の客舍で永眠したのであります。享年六十二歳。その辭

世の歌は、

花浦の松の葉白くおく霜の
消ゆるもあはれ一さかりかな

とあります。彼女は實に己を捨てて人に盡くし、國に盡くしたる、我が日本の女性の特色を、最もよく發揮したる一人でありました。

たが身にもありとは知らで纏ふめり
神の形見のやまとだましひ

彼女は實に、大和魂を、神の形見として、信仰したる信者でもあり、且實行家でもありました。

（日本名婦傳）

釋宗演
俗名は一瀬常吉。臨濟宗圓覺寺派管長。福井縣の人。大正八年歿、年六十一。

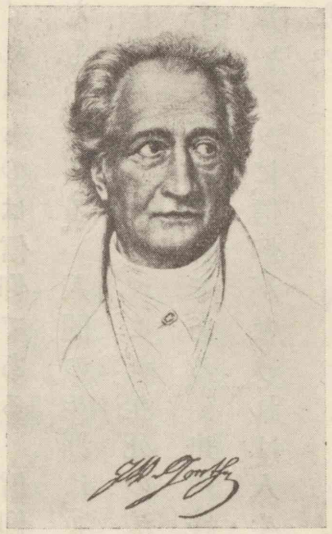
二三　信仰

釋宗演

ドイツの詩人ゲーテは、「信仰はあらゆる知識の極度である。」といつた。知識が行詰つた時、眼前に横たはつて居る黑金の垣を突破して、眞理の寶藏に進み入ることの出來る智慧と力とを與へてくれるものは信仰である。信仰はこれを譬へれば舟や筏のやうなものである。人間の生涯は「水の流と人の身の――」と、謠の文句にあるやうに、たゞこれ生死の流である。此の生死の流を渡る舟や筏が卽ち信仰である。舟や筏がなければ海を渡ることが出來ないやうに、信仰がなければ人生の海を渡りおほせることは出來ない。

普通に信仰といへば、單に慰安・氣休めになるものぐらゐにしか解されてゐないが、信仰は單に慰安・氣休めになるばかりでなく、人

を活動させる大原動力となるものである。信仰は人に勇氣を與へる、活氣を與へる、獅子奮迅の勢を振ひ起させる。信仰を得た人は、恰も飢ゑた人が食を得たやうなものである。眞理の大寶藏に向つて向上の一路を驀進しようとする青年男女に、若し信仰がなかつたならば、所詮途中の障害物を突破することは出來ない。佛教では、信仰を稱して一に大覺といひ、大覺を得た人を覺者とも佛陀とも稱する。大覺とは平易にいへば「さとり」である。自覺・覺他・覺行圓滿の境地に至つたのが覺者卽ち佛陀で、佛陀になつたほどの人は、其の信仰によつて眞理を徹見する力を有して居るから、決して知識の行詰ることはないものである。向上の



ゲーテ

富貴も云々
「富貴モ淫スル能ハズ、貧賤モ移ス能ハズ、威武モ屈スル能ハズ、此ヲ之レ大丈夫ト謂フ。」
（孟子）

一路を驀進しようとする青年男女に信仰の必要な所以は此處にある。あのゲーテの言のやうに、信仰は如何にも知識の極度に相違はないが、これと同時に、また知識の端緒でもある。絶對や空想を排斥して、實驗を主とする今日の科學的研究法に於ても、其の基礎となるものは信仰である。信仰がなければ辨異・統同を行ふことは出來ない、歸納も演繹も批判も出來ない。富貴も淫することが出來ず、貧賤も移すことの出來ない道德的大勇猛心も、また信仰によらねば之を得ることは出來ないものである。

（叩けよ開かれん）

芥川龍之介
小説家。東京市の人。昭和二年歿、年三十六。

二四　蜜柑

芥川龍之介

或曇つた冬の日暮である。私は横須賀發上り二等客車の隅に腰をおろして、ぼんやり發車の笛を待つてゐた。とうに電燈の點いた客車のなかに、珍しく私の外に一人も乘客はゐなかつた。外を覗くと薄暗いプラットフォームには、今日は珍しく見送の人影さへ跡を絶つて、たゞ檻に入れられた小犬が一匹、時々悲しさうに吠え立ててゐた。これ等は、その時の私の心持と不思議なくらゐ似つかはしい景色だつた。私の頭のなかには、いひやうのない疲勞と倦怠とが、まるで雪雲の空のやうな、どんよりした影を落してゐた。私は外套のポケットへじつと兩手をつゝこんだまゝ、そこにはひつてゐる夕刊を出して見ようといふ元氣さへ起らなかつた。

が、やがて發車の笛が鳴つた。私はかすかな心の寛ぎを感じながら、後の窓枠へ頭をもたせて、眼の前の停車場がずる〳〵と後ずさりを始めるのを待つともなく待構へてゐた。ところが、それよりも先に、けたゝましい日和下駄の音が改札口の方から聞え出したと思ふと、間もなく車掌の何かいひ罵る聲と共に、私の乘つてゐる二等室の戸ががらりと開いた。十三四の小娘が一人慌しく中へはひつて來た。と、同時に一つづしりと搖れて、徐に汽車は動き出した。一本づつ眼をくぎつて行くプラットフォームの柱、置き忘れたやうな運水車、それから車内の誰かに祝儀の禮をいつてゐる赤帽――さういふすべては、窓へ吹きつける煤煙の中に、未練がましく後へ倒れて行つた。私は漸くほつとした心持になつて、卷煙草に火をつけながら、始めて懶い瞼をあげて、前の席に腰をおろしてゐた小娘の顔を一瞥した。

それは油氣のない髪をひつつめの銀杏返しに結つて、横なでの

痕のある、輝だらけの兩頰を氣持の惡いほど赤くほてらせた、如何にも田舍者らしい娘だつた。しかも垢染みた萌黃色の毛絲の襟卷がだらりと垂れ下がつた膝の上には、大きな風呂敷包があつた。その又包を抱いた霜燒の手の中には、三等切符が大事さうにしつかり握られてゐた。私は此の小娘の下品な顏だちを好まなかつた。それから彼女の服裝が不潔なのもやはり不快だつた。最後にその二等と三等との區別さへも辨へない愚鈍な心が腹立たしかつた。だから、卷煙草に火をつけた私は、一つには此の小娘の存在を忘れたいと思ふ心持もあつて、今度はポケットの夕刊を漫然と膝の上へひろげて見た。すると、其の時夕刊の紙面に落ちてゐた外光が突然電燈の光に變つて、刷の惡い何欄かの活字が意外なくらゐ鮮やかに私の眼の前へ浮かんで來た。いふまでもなく汽車は今横須賀線に多い隧道の最初のそれへはひつたのである。

それから幾分か過ぎた後であつた。ふと何かに脅された樣な心持がして、思はずあたりを見まはすと、何時の間にか例の小娘が、向ふ側から席を私の隣へ移して、頻りに窓を開けようとしてゐるが、重い硝子戸はなか〳〵思ふやうに開かないらしい。輝だらけの頰は愈〻赤くなつて、時々鼻洟をすゝりこむ音が、小さな息の切れる聲と一緒に、忙しなく耳へはひつて來た。これは勿論私にも幾分ながら同情を惹くに足るものには相違なかつた。併し、汽車が今將に隧道の口へさしかゝらうとしてゐることは、暮色の中に枯草ばかり明るい兩側の山腹が間近く窓側に迫つて來たのでも、すぐに合點の行く事であつた。にも拘らず、此の小娘は、わざ〳〵しめてある窓の戸をおろさうとする。——其の理由が、私には呑みこめなかつた。いや、それが私には、單に此の小娘の氣まぐれだとしか考へられなかつた。だから、私は腹の底に依然としてけはしい

感情を蓄へながら、あの霜焼の手が硝子戸を開けようとして悪戰苦闘する樣子を、まるでそれが永久に成功しない事でも祈るやうな冷酷な眼で眺めてゐた。　すると間もなく、凄じい音をはためかせて汽車が隧道へなだれこむと同時に、小娘の明けようとした硝子戸は、たうとうばたりと下へ落ちた。　さうして其の四角な穴の中から、煤を溶かしたやうなどす黑い空氣が、俄に息苦しい煙になつて、濛々と車内へ漲り出した。　元來咽喉を害してゐた私は、手巾を顏にあてる暇さへなく、此の煙を滿面に浴びせられた。　お蔭で、殆ど息もつけないほど咳き込まなければならなかつた。　が、小娘は私に頓着する氣色も見えず、窓から外へ首をのばして、闇を吹く風に銀杏返しの鬢の毛を戰がせながら、じつと汽車の進む方向を見やつてゐる。　其の姿を煤煙と電燈の光との中に眺めた時、もう窓の外が見る〳〵明るくなつて、そこから土の匂や枯草の匂や水

の匂が冷やかに流れこんで來なかつたなら、漸く咳き止んだ私は、此の見知らない小娘を頭ごなしに叱りつけてでも、又元の通り窓の戸を締めさせたのに相違なかつたのである。

併し、汽車はその時分には、もうやす〳〵と隧道を辷りぬけて、枯草の山と山との間に挾まれた、或貧しい町はづれの踏切に通りかかつてゐた。　踏切の近くには、何れも見すぼらしい藁屋根や瓦屋根がごみ〳〵と狹苦しく建てこんで、踏切番が振るのであらう、唯一旒の薄白い旗が懶げに暮色を搖つてゐた。　やつと隧道を出たと思ふ――其の時、其の蕭索とした踏切の柵の向ふに、私は頰の赤い三人の男の子が、目白押しに並んで立つてゐるのを見た。　彼等は皆此の曇天に押しすくめられたかと思ふほど、揃つて背が低かつた。　さうして、又此の町はづれの陰慘たる風物と同じやうな色の着物を着てゐた。　それが汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一齊に

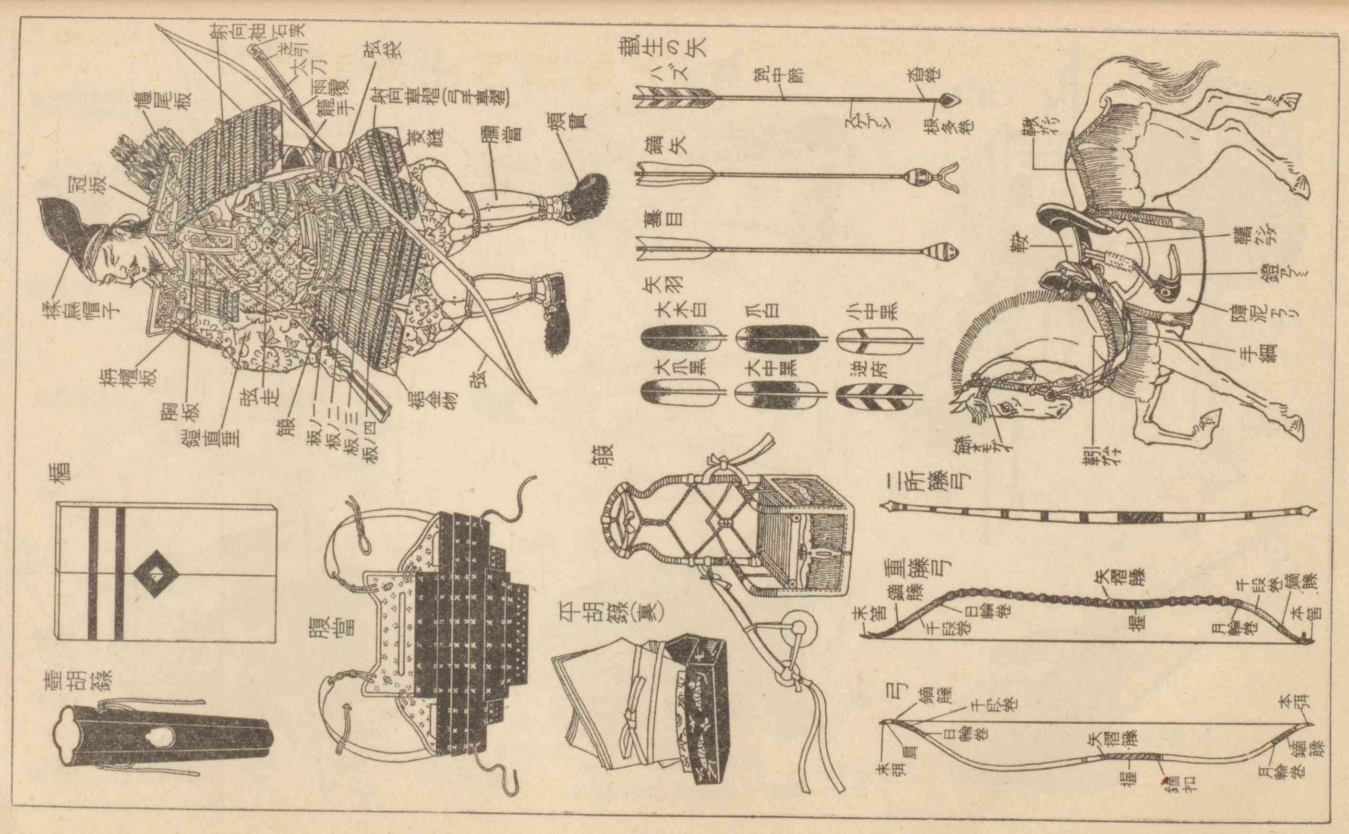
手を擧げるが早いか、いたいけな喉を高く反らせて、何とも意味の分らない喊聲を一所懸命に迸らせた。すると、其の瞬間である。窓から半身を乘出してゐた例の娘が、あの霜燒の手をつと伸して、勢よく左右に振つたと思ふと、忽ち心を躍らすばかり暖かな日の色に染まつてゐる蜜柑が、およそ五つ六つ、汽車を見送つた子供達の上へばら〳〵と空から降つて來た。私は思はず息を呑んだ。さうした刹那に一切を了解した。小娘は、恐らくはこれから奉公先へ赴かうとしてゐる小娘は、其の懷に藏してゐた幾顆の蜜柑を窓から投げて、わざ〳〵踏切まで見送りに來た弟達の勞に報いたのである。

暮色を帶びた町はづれの踏切と、小鳥のやうに聲をあげた三人の子供達と、さうして其の上に亂落する鮮やかな蜜柑の色と、——凡ては汽車の窓の外に、瞬く暇もなく通り過ぎたが、私の心の上に

は、せつないほどはつきりと、此の光景が燒き附けられた。さうしてそこから或えたいの知れない朗らかな心持が涌きあがつて來るのを意識した。私は昂然と頭を擧げて、まるで別人を見るやうに、あの小娘を注視した。小娘は何時かもう私の前の席に歸つて、相變らず輝だらけの頰を萌黃色の毛絲の襟卷に埋めながら、大きな風呂敷包を抱へた手に、しつかりと三等切符を握つてゐる。——

私は此の時始めていひやうのない疲勞と倦怠とを、さうして又不可解な、下等な、退屈な人生を纔かに忘れる事が出來たのである。

新制女子國語讀本　卷六終

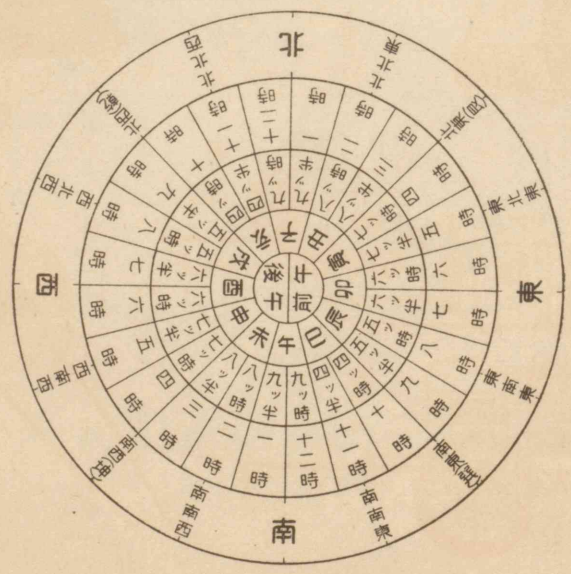


官職表

（大寶令を基本としたるもの）

官職／官等	長官（カミ）	次官（スケ）	判官（ジョウ）	主典（サクワン）
神祇官	伯	小副	大祐	大史
太政官	太政大臣 左・右大臣 内大臣	大納言 中納言 参議	少納言 左・右大・中・小弁	大外記 小史
八省	卿	小輔	大丞	小大錄
武官・警察	彈正臺尹	小大弼	小大忠	小大疏
	左右近衛府大將	小中將	將監	將曹
	左右衛門府督	左右佐	小大尉	小大志
	左右兵衛府	同	同	同
	左右馬寮	頭	小大允	小大屬
	檢非違使	別當	佐	小大尉	小大志
地方官	左右京職	大夫	亮	進	屬
	大宰府	帥	小大貳	小大監	小大典
	國司	小大守	介	小大掾	小大目
其他	藏人所	頭	五位	六位	／

方位及び時の圖



文語助動詞連續法

體言	未然形につくもの	連用形につくもの	終止形につくもの	連體形につくもの	已然形につくもの
ラ變	有ら	有り	有り	有る	有れ
四段	讀ま	讀み	讀む	讀む	讀め
ナ變	死な	死に	死ぬ	死ぬる	
上二段	起き	起き	起く	起くる	起くれ
上一段	着	着	着る	着る	着れ
下二段	受け	受け	受く	受くる	受くれ
下一段	蹴	蹴	蹴る	蹴る	蹴れ
カ變	來こ	來き	來く	來る	來る
サ變	爲せ	爲し	爲す	爲する	爲する
花言	花	花	花	花	

- 未然形につくもの：する（ナ變・四段）／り／らる／さす／しむ／まし／ず／ざり／じ／まほし
- 連用形につくもの：けん／き／つ／ぬ／けり／たり／たし／ナ變に（はつゝ／かぬ）／カ變・サ變は（特例）
- 終止形につくもの：べし／べからむ／らし／めり／まじ／なり（詠歎）
- 連體形につくもの：べし／べからむ／らし／めり／まじ／なり（指定）／如し
- 已然形につくもの：り

動詞活用對照表

*「蹴ル」ハ國語ニテハ四段ニモ活用ス

口語 種類	語	活用形 未然	連用	終止	連體	假定	命令
四段活用（カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ラ行）	書	カ	キ	ク	ク	ケ	ケ
	死	ナ	ニ	ヌ	ヌ	ネ	ネ
	有	ラ	リ	ル	ル	レ	レ
上一段活用（カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ヤ・ラ・ワ行）	起	キ	キ	キル	キル	キレ	キ・ロヨ
	着	キ	キ	キル	キル	キレ	キ・ロヨ
下一段活用（ア・カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ヤ・ラ・ワ行）	得	エ	エ	エル	エル	エレ	エ・ロヨ
	*蹴	ケ	ケ	ケル	ケル	ケレ	ケ・ロヨ
カ行變格	來	コ	キ	クル	クル	クレ	コイ
サ行變格	爲	セ	シ	スル	スル	スレ	セヨ・シロ

文語 種類	語	活用形 未然	連用	終止	連體	已然	命令
四段活用（カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ラ行）	書	カ	キ	ク	ク	ケ	ケ
奈行變格	死	ナ	ニ	ヌ	ヌル	ヌレ	ネ
良行變格	有	ラ	リ	リ	ル	レ	レ
上二段活用（カ・タ・ハ・マ・ヤ・ラ行）	起	キ	キ	ク	クル	クレ	キヨ
上一段活用（カ・ナ・ハ・マ・ヤ・ワ行）	着	キ	キ	キル	キル	キレ	キヨ
下二段活用（五十音各行）	得	エ	エ	ウ	ウル	ウレ	エヨ
下一段活用	蹴	ケ	ケ	ケル	ケル	ケレ	ケヨ
カ行變格	來	コ	キ	クル	クル	クレ	コヨ
サ行變格	爲	セ	シ	スル	スル	スレ	セヨ

形容詞活用對照表

口語 種類	語	活用形 未然	連用	終止	連體	假定	命令
ク活用	高	○	ク	イ	イ	ケレ	○
シク活用	美	○	シク	シイ	シイ	シケレ	○

文語 種類	語	活用形 未然	連用	終止	連體	已然	命令
ク活用	高	ク	ク	シ	キ	ケレ	○
シク活用	美	シク	シク	シ	シキ	シケレ	○

助動詞活用對照表

口語 種類	語	活用形 未然	連用	終止	連體	假定	命令
受身	レル	レ	レ	レル	レル	レレ	レヨ・レロ
	ラレル	ラレ	ラレ	ラレル	ラレル	ラレレ	ラレヨ・ラレロ
可能	レル	レ	レ	レル	レル	レレ	
	ラレル	ラレ	ラレ	ラレル	ラレル	ラレレ	
使役	セル	セ	セ	セル	セル	セレ	セヨ・セロ
	サセル	サセ	サセ	サセル	サセル	サセレ	サセヨ・サセロ
尊敬	レル	レ	レ	レル	レル	レレ	
	ラレル	ラレ	ラレ	ラレル	ラレル	ラレレ	
指定	デス	デス	デス	デス			
	ダ	ダ	ダ	ダ			
	ダス	ダラ・デセ	ダツ・デシ	ダ・デス			
	タ	タラ	タリ	タ	タ		

文語 種類	語	活用形 未然	連用	終止	連體	已然	命令
受身	ル	レ	レ	レル	レル	レレ	レヨ・レロ
	ラル	ラレ	ラレ	ラル	ラル	ラレ	ラレヨ・ラレロ
可能	ル	レ	レ	ル	ル	レ	
	ラル	ラレ	ラレ	ラル	ラル	ラレ	
使役	ス	セ	セ	ス	スル	スレ	セヨ
	サス	サセ	サセ	サス	サスル	サスレ	サセヨ
尊敬	ル	レ	レ	ル	ルル	ルレ	レヨ
	ラル	ラレ	ラレ	ラル	ラルル	ラルレ	ラレヨ
	サス	サセ	サセ	サス	サスル	サスレ	サセヨ
	シム	シメ	シメ	シム	シムル	シムレ	シメヨ
指定	ナリ	ナラ	ナリ	ナリ	ナル	ナレ	
	タリ	タラ	タリ	タリ	タル	タレ	タレ
	ケリ	ケ	キ	キ	シ	シカ・ケレ	

文語助動詞連續法

體言		未然形につくもの	連用形につくもの	終止形につくもの	連體形につくもの	已然形につくもの
花	サ變	爲(せ)り	爲(し)	爲(す)	爲(する)	爲(すれ)
	カ變	來(こ)	來(き)	來(く)	來(くる)	來(くれ)
	下一段	蹴	蹴	蹴	蹴る	蹴れ
	下二段	受け	受け	受く	受くる	受くれ
	上一段	着	着	着る	着る	着れ
	上二段	起き	起き	起く	起くる	起くれ
	ナ變	死な	死に	死ぬ	死ぬる	死ぬれ
	四段	讀ま	讀み	讀む	讀む	讀め(り)
	ラ變	有ら	有り	有り	有る	有れ
		る				
		り				
		らる				
		さす				
		しむ				
		ず				
		じ				
		ざり				
		まほし				
			け(き)			
			ん(む)			
			カ變・サ變は特例			
			ナ變に(は)つ(ぬ)かぬ			
			つ(ぬ)			
			り(けり)			
			たり			
			たし			
				べし	べし	べし
				らむ	らむ	らから
				らし	らし	
				めり	めり	
				まじ	まじ	
				なり(詠歎)		
						なり(指定)
						如し

口語助動詞連續法

體言		未然形につくもの	連用形につくもの	終止形につくもの	連體形につくもの
	サ變	*爲(せ)(し)			
	カ變	來(き)	來(き)	來(くる)	來(くる)
	下一段	捨て	捨て	捨てる	捨てる
	上一段	落ち	落ち	落ちる	落ちる
	四段	書か	書き	書く	書く
		れる(せる)			
		う			
		られる(させる)			
		よう			
		*まい			
		ぬ(*ない)			
			た(たい)		
			ます		
				まい	
				らしい	
					(の)だ
					(の)です
					やうだ
					だ
					です
					(の)やうだ

音便

	動詞	形容詞
い音便	咲きて―い 防ぎて―い	青き海―い
う音便	問ひて―う	甘くなる―う
撥音便	死にて―ん 飛びて―ん 富みて―ん	
促音便	祝ひて―つ 持ちて―つ 知りて―つ	

比況		希望	打消	推量	時	指定	尊敬
ヤウダ ヤウデス		タイ	ナイ ヌ	ラシイ マイ	タ ウ ヨウ	ダ デス	レル ラレル
ヤウダラ ヤウデセ					タラ	ダラ デセ	レ ラレ
ヤウダツ ヤウデシ		タク	ズ ナク	ラシク	タリ	ダツ デシ	レ ラレ
ヤウダ ヤウデス		タイ	ヌ ナイ	ラシイ マイ	タ ウ ヨウ	ダ デス	レル ラレル
		タイ	ヌ ナイ	ラシイ	タ		レル ラレル
		タケレ	ネ ナケレ	ラシケレ			レレ ラレレ

比況	詠歎	希望	打消	推量	時	指定	尊敬
ゴトシ	ナリ ケリ	タシ マホシ	ザズ ジ	ラベシ ラシ マジ	ケキ ツリ ヌリ タリ ムリ	ナリ タリ	ラル スル サス シム
ゴトク		タク マホシク	ズ ザラ	ベク マジク	テ ナ タラ	ナラ タラ	レ ラレ セ サス シメ
ゴトク		タク マホシク	ズ ザリ	ベク マジク	テ ニ タリ	ナリ タリ	レ ラレ セ サセ シメ
ゴトシ	ナリ ケリ	タシ マホシ	ズ ジ	ラム ベシ ラシ マジ	キ ケリ ツ ヌ タリ ムリ	ナリ タリ	ラル スル サス シム
ゴトキ	ナル ケル	タキ マホシキ	ヌ ザル ジ	ラム ベキ ラシ マジキ	シ ケル ツル ヌル タル ムル	ナル タル	ルル ラルル スル サスル シムル
	ナレ ケレ	タケレ マホシケレ	ネ ザレ ジ	ラメ ベケレ ラシ マジケレ	シカ ケレ ツレ ヌレ タレ メ	ナレ タレ	ルレ ラレレ スレ サスレ シムレ
			ザレ		テヨ ネ	タレ	レヨ ラレヨ セヨ サセヨ シメヨ

昭和十二年七月十九日　印刷
昭和十二年七月廿五日　發行
昭和十三年一月五日　修正再版印刷
昭和十三年一月十日　修正再版發行

新制女子國語讀本

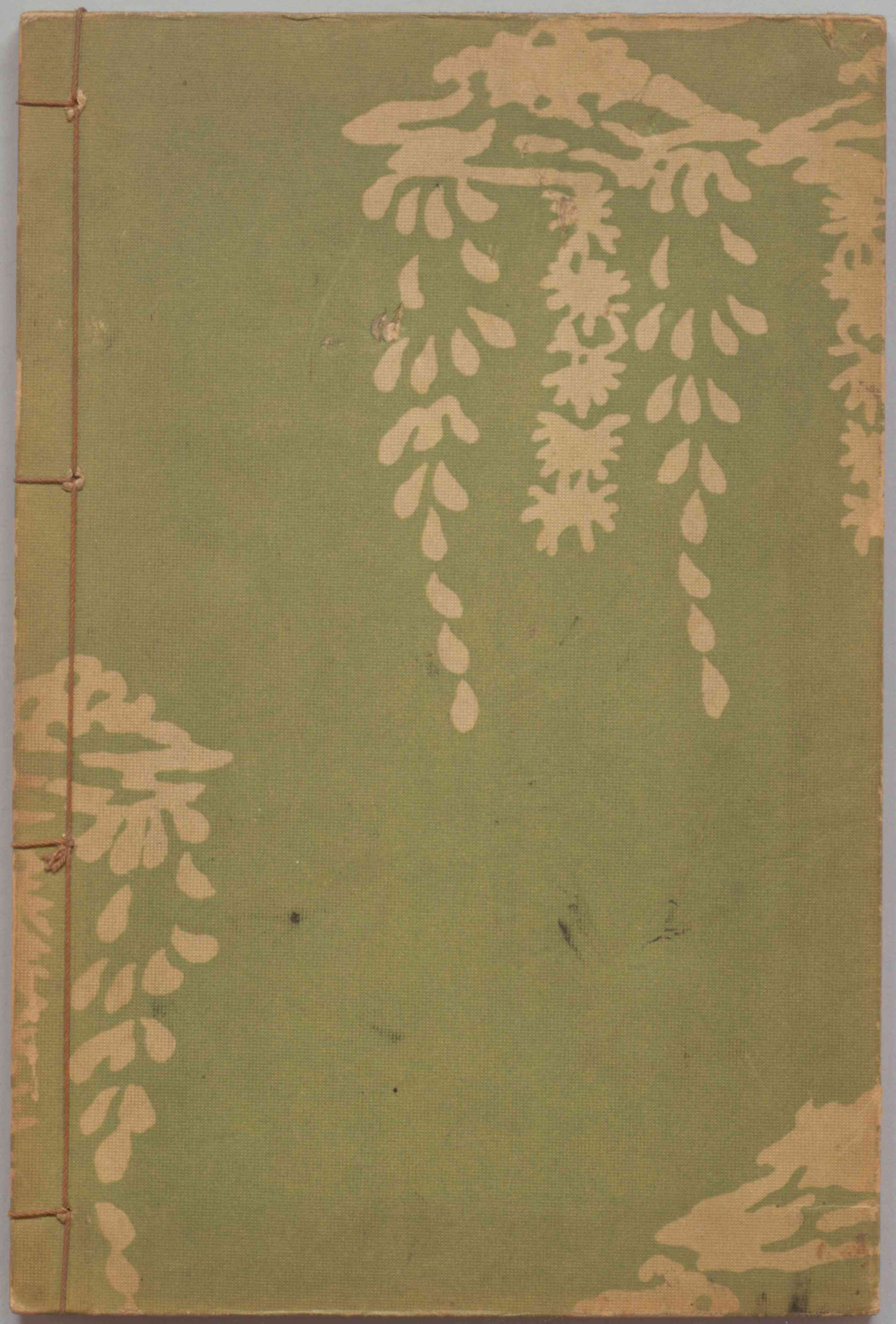
定價　卷一——卷九　各金六十錢
　　卷十　各金五十九錢

編者　安藤正次
編者　東條操

東京市神田區神保町一丁目一番地
發行者　株式會社三省堂
代表者　龜井寅雄

東京市蒲田區仲六郷一丁目五番地
印刷者　株式會社三省堂蒲田工場
代表者　龜井豐治

不許複製

發行所
（東京市神田區神保町一丁目一番地）
振替東京三一五五五番　株式會社三省堂
（大阪市西區阿波座下通二丁目六番地）
振替大阪八一三〇〇番　株式會社三省堂大阪支店

（朝比奈製本）